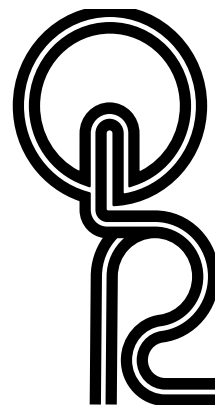


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 12 No.5, 2005



2005年大会巡検風景 三瓶山西の原の露頭にて、黒色土壌を挟んで4時期の噴出物を見ることが出来る。最下位は1.6万年前(三瓶火山第4活動期)の噴出物。遠隔地まで分布している噴出物に関心が集まった。(中村唯史撮影)

Vol. 12 No. 5

October 1, 2005

2005年日本第四紀学会論文賞 2	評議員会議事録 15
講演会・報告会・セミナー・国際会議の 案内 4	会計・会則・投稿規定資料・役員名簿・ 20
2005年大会巡検報告 8	総会議事録 30
研究委員会活動報告 9	会員消息 31
研連その他委員会報告 10	

2005年日本第四紀学会論文賞

日本第四紀学会論文賞受賞候補者選考委員会（岩田修二委員長、阿部祥人、辻 誠一郎、兵頭政幸、福澤仁之各委員）は、第四紀研究第42巻、第43巻に掲載された、会員を筆頭者とする論文を対象として、慎重に審議した結果、次の2論文を授賞対象に選定いたしました。選考にあたっては、若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを意識し、独創性、論理性、発展性、学際性などについて検討致しました。

長島佳菜・多田隆治・松井裕之

「過去14万年間のアジアモンスーン・偏西風変動 - 日本海堆積物中の黄砂粒径・含有量からの復元 - 」第43巻2号、85-97ページ、2004年

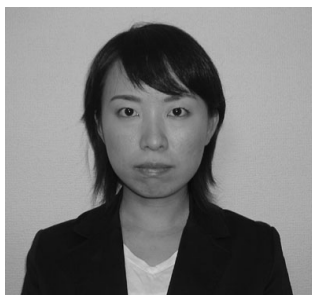
<受賞理由>

海底コアの分析結果は第四紀学の進展に大きく貢献してきた。なかでも、日本海の海底コアは、日本列島に対する大陸からの影響と、太平洋からの影響の両方を示すという点において多くの貴重な情報を提供してきた。この研究では、日本海秋田沖の海底で採取された海底コア中の風成塵(黄砂)粒子の詳細な粒径と含有量を計測し、最終間氷期からの、過去14万年間の高分解能記録を得た。これは、日本海に飛来した風成塵の量の変動を示しており、グリーンランド氷床コアGRIPの酸素同位体比変動と類似した変動パターン(Dansgaard-Oeschgerサイクルに対応した数千年スケールでの風送塵変動)が認められた。この、氷床コアとの対比と変動様式の比較から、亜氷期および亜間氷期での偏西風と夏季モンスーンの強弱を推測した。さらに、GRIPコアのMIS5e部分の酸素同位体記録が信用に足るものであることをも明らかにした。

本論文の、亜間氷期には夏季モンスーンが強かったか、あるいは偏西風が弱かった。一方、亜氷期にはその逆であったという結論は予想されるものではあるが、高精度のデータが論文の価値を高めている。手堅く、地道な分析の積み上げが、氷期・間氷期変動にともなう夏季モンスーンと偏西風の変動をとらえるのに成功した。国際的にも評価される研究であり、地球規模の環境変動にも貢献する論文である。

<受賞者の言葉>

長島佳菜
(東京大学大学院
理学系研究科)



この度は日本第四紀学会論文賞を賜り、大変

光栄に存じます。日本海で採取された素晴らしいコア試料に会えたことが、今回賞を頂くきっかけとなりました。コア試料を提供して下さいた北海道大学の長嶋忠道教授を始め、粒度分析および解析について多くのご助言を頂いた同大学の入野智久博士、産業技術総合研究所の池原 研博士、そしてコア試料の採取や分割に携わった全ての方々にこの場をお借りして、心より感謝申し上げます。

近年、東アジア地域の気候を支配するアジアモンスーンが、最終氷期における数千年周期の急激な気候変動、いわゆるダンスガード・オシュガー・サイクルに連動して変動していた可能性が幾つかの研究から示唆され、ダンスガード・オシュガー・サイクルの伝播・増幅過程において、アジアモンスーンが果たす役割を明らかにすることが重要な課題になっています。

日本海は偏西風およびアジアモンスーンの風下に位置し、従来の研究から風成塵の連続的な堆積が知られています。また、日本海で採取されたコア試料には、AMS¹⁴C年代値や火山灰・酸素同位体層序による年代モデルが作成され、日本海堆積物は、過去におけるモンスーン・偏西風変動の詳細な記録媒体として期待されてきました。しかし日本海には、風成塵以外にも、周囲の陸地から河川を通じて碎屑物が供給されていると考えられ、風成塵の情報を取り出すのは容易ではありません。そうした中、本論文では、碎屑物の粒度分布や元素・鉱物組成に基づき、日本海堆積物からの風成塵粒径や含有量の抽出に取り組みました。復元した風成塵の粒径・含有量は数千年周期の変動を示し、アジア夏季モンスーンもしくは偏西風の強度変化がダンスガード・オシュガー・サイクルに同調して変動した可能性を提示しました。本論文において、日本海堆積物に含まれる風成塵が、ダンスガード・オシュガー・サイクルに連動したモンスーン・偏西風変動を詳細に記録していることを明らかにしたことは、日本海堆積物を用いた、モンスーン・偏西風の具体的変動様式の解明に向けた第一歩であると考えております。

今後も継続して研究を行い、東アジア地域の大気循環変動の復元を通じて第四紀学の発展に寄与できればと望む次第です。今後とも、皆様のご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

北村晃寿・木元克典

「3.9 Ma から 1.0 Ma の日本海の南方海峡の変遷史」第 43 巻 6 号、419-434 ページ、2004 年

< 受賞理由 >

日本海が日本列島の環境に大きな影響を与えていることは言うまでもないことである。なかでも、東シナ海と日本海をつなぐ海峡（日本海南方海峡）のあるなしは決定的に大きな影響を与えてきた。

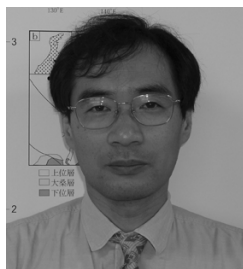
この論文は、日本海沿いに分布する上部鮮新統から下部更新統の暖流系貝類化石と浮遊性有孔虫化石の層位分布から日本海の南方海峡のあるなしの変遷を明らかにしたものである。まず、金沢市の大桑層の化石記録にもとづいて、海生生物化石の生態学的検討によって有効な化石を選び出し、つぎに、秋田県から石川県までの日本海沿岸で得られた化石記録のデータを検討した。

この論文は、間氷期の寒水系貝類の地域的な絶滅、暖流系貝類と暖流系浮遊性有孔虫の出現という事実を対馬海流流入の指標としているところに特徴がある。そして、得られた古生物学的データを海洋酸素同位体比データに基づくグローバルな海面変化に照らし合わせて、化石記録が豊富な 3.9 Ma から 1.0 Ma までの日本海南方海峡の変遷史を明らかにした。

筆頭著者の北村氏はこれまで大桑層を中心とした本州の日本海沿いに分布する鮮新統 - 更新統の古生物学的研究を行い、それに基づいた数多くの古海洋学的成果をあげてきた。この論文は、その集大成と言えるものであり、海域における歴史生物地理の集大成である。研究の方法および理論展開が明快なすぐれた論文である。主張する内容にも説得力がある。

< 受賞者の言葉 >

北村晃寿
(静岡大学理学部)



この度は、日本第四紀学会論文賞を賜り、大変光栄に存じます。今回賞をいただいた論文の基盤は、筆頭著者である北村が金沢大学大学院博士課程進学後に始めた大桑層に関わる研究です。この研究の成果 - 同層に見られる堆積サイクルとそれに同調した寒暖両水系貝類群集の周期的変遷は、前期更新世の 4.1 万年周期の氷期間氷期サイクルによる - によって研究者としての今日の私があるわけですが、それは指導教官の小西健二教授をはじめとする多くの方々から

の適切な指導の賜物でもあります。故 野義夫教授の採集・保管していた大桑層産の貝化石標本は、研究を進めるうえで大変役に立ちました。大桑層の堆積サイクルと酸素同位体比変動曲線との対比の確立には、金沢大学教養部の高山俊昭教授、加藤道雄教授らによる大桑層の生層序学的研究ならびに、富山大学の酒井英男教授との古地磁気層序の研究が決定的な役割を果たしました。私が学部に入學した 1981 年に金沢大学教養部に着任された大場忠道教授からは酸素同位体層序学の知識を御教示いただきました。理学部の山田一雄教授と大村明雄教授からは地質調査のノウハウを御教示いただきました。私が大学院博士課程に進学した年に着任された神谷隆宏博士には、二枚貝の化石化過程の専門家の近藤康生博士を紹介いただき、近藤博士との議論は大桑層の研究戦略の立案に重要な役割を果たしました。そして、京都大学での学術振興会特別研究員時代には鎮西清高教授から研究や論文作成のためのデザインについて学ぶことができました。これらの皆様にこの場を借りて感謝の意を表します。そして本論のような統合的研究の結実には、様々な分野の方からの支援が必要であり、そうした研究環境を創出いただいた小西健二教授には大変に感謝しております。

さて、2005 年度大会において承認された本学会の倫理憲章前文には、「地球の環境変動」や「生物多様性の保全」という文言があります。私の研究は、過去の温暖化の実態とそれに対する海洋生物の生物地理的応答の解明を目的としているので、その内容は倫理憲章と符合すると言っても過言ではないでしょう。しかしながら前文には、学術成果を人類社会の持続的発展のために役立たせるようにも求めています。地震、津波、火山噴火といった突発的で劇的な自然災害の研究は、社会と直接的に関わっていますが、本研究のように数万年規模の気候変動はもとより、最近研究が活発に行われている千年から数千年規模の気候変動ですら、人類社会の持続的発展と直接的に結び付けるのは困難と言えます。確かに二酸化炭素の増加に伴う温暖化対策は社会的に認知されています。しかし、これはもっぱら測器記録の示す 20 世紀後半の温暖化傾向によるものです。第四紀学で扱う古気候・古環境に関する研究をより多くの人に注目してもらうには、やはり気温・水温の定量的復元が必要となります。したがって、私はこの研究論文を受賞理由に評されたような『集大成』（現時点での評価は極めて適切です）にしたままではなく、水温の定量的復元を試みることによって本論のバージョンアップを図るとともに、こうした新たな研究手法の導入を通じて、第四紀学におけるこの分野の発展に寄与したいと考えております。

Nick Shackleton 教授の講演会の案内

前 INQUA 会長の Nick Shackleton 教授が、旭硝子財団から今年度のブループラネット賞を受賞されました。その受賞講演会が10月20日(木)と21日(金)に下記の要領で開催されます。講演会に参加を希望される方は、(財)旭硝子財団と国立環境研究所にそれぞれ事前申込みが必要です。詳しくはそれぞれのホームページをご覧ください。

10月20日(木) 午後1時30分～3時、国際連合大学(東京都渋谷区神宮前) (財)旭硝子財団(<http://www.af-info.or.jp>)へ申込み、希望者多数の場合は抽選になります。

10月21日(金) 午後1時～1時45分、国立環境研究所(茨城県つくば市) 国立環境研究所国際室(<http://www.nies.go.jp>)へ申込み、希望者多数の場合は先着優先になります。

2005年活断層調査成果および堆積平野地下構造調査成果報告会の開催について

文部科学省研究開発局
地震・防災研究課

文部科学省は、地方自治体が平成16年度に実施した活断層調査及び堆積平野地下構造調査の成果等を広く普及するため、2005年活断層調査成果および堆積平野地下構造調査成果報告会を開催します。

報告会では口頭発表の他、ポスター展示などを行います。

参加ご希望の方は下記の申込先までファックスまたははがきにてお申し込み下さい。

開催日：平成17年11月10日(木)、11日(金)

会場：こまばエミナースホール(東京都目黒区大橋2-19-5)

主催：文部科学省

目的：地方自治体が実施した活断層調査及び堆積平野地下構造調査の成果等を発表し、これを広く普及させるとともに、専門家等の意見を今後の文部科学省委託金調査へ反映させることを目的として、成果報告会を開催します。

内容：平成16年度に、文部科学省地震関係基礎調査交付金により、地方自治体が実施した活断層調査と堆積平野地下構造調査の成果について各自治体の担当者が発表します。

また、発表を行った調査についてのポスターセッションも行います。

なお、プログラム等詳しい内容につきましては、9月中旬頃に決定しますので、それ以降に下記連絡先までお問い合わせ下さい。

定員：500名(先着順)

参加費：無料

申込方法：ファックスまたははがきで、氏名、住所(勤務先又は自宅)、電話・ファックス番号、勤務先名を明記の上、11月7日(月)までに下記へお送り下さい。

問い合わせ・申込先：

〒101-0064 東京都千代田区猿楽町1-5-18 千代田ビル5階

(財)地震予知総合研究振興会 地震調査研究センター 活断層・地下構造報告会係

TEL：03-3295-1501 FAX：03-3295-1507

“東海地震”防災セミナー2005[第22回]のお知らせ

昭和59年以来、毎年静岡市で開いてきましたが、本年も下記のとおり開催致します。関心をお持ちの方々のご参加を期待します。

日時：平成17年11月9日(水)13:30 - 16:00
 会場：静岡商工会議所会館5階ホール(JR静岡駅北口西側)
 テーマ：東海地震に備える
 座長：静岡大学名誉教授 土 隆一

1. 地震防災教育と企業の防災対策
 静岡大学理学部教授・防災・ボランティアセンター長 里村 幹夫
2. 津波と東海地震 - インド洋津波の教訓 -
 産業技術総合研究所・活断層研究センター副センター長 佐竹健治

主催：東海地震防災研究会
 連絡先：〒422-8035 静岡市駿河区宮竹1-9-24 土研究事務所 土 隆一
 Tel：054-238-3240 Fax：054-238-3241

ご案内：第3回国際デルタ会議(IGCP-475年会)。 An International Conference on DELTAS (Borneo venue): Depositional Systems and Stratigraphic Development

2006年1月13日～18日
 ブルネイ・ダルサラーム大学

IGCP-475「モンスーンアジア太平洋地域のデルタ」の第3回年会在、来年1月にブルネイ大学で開催されます。登録及び発表申し込みのサーキュラーが発行されました。以下のURLからダウンロードが可能です。

<http://unit.aist.go.jp/igg/rg/cug-rg/ADP.html> .

登録、発表、ホテルの申し込みの締め切りは10月15日です。是非、ご参加ください。

IGCP-475の年会在は、第1回が2004年1月にタイのバンコクとアユタヤで、第2回が2005年1月にベトナムのホーチミン市で開催され、約20ヶ国からそれぞれ約100名の参加がありました。今回は第3回になります。第4回は2007年1月にバングラデシュ、第5回は、2008年1月に中国で開催されることになっています。これらの会合では、チャオプラヤデルタ、メコンデルタ、ガンジス・ブラマプトラデルタ、長江・黄河デルタと大陸の大規模デルタが巡検に含まれますが、今回の第3回会合は島嶼で開催され、アジアとオセアニアの島嶼の代表的なデルタの巡検が予定されています。陸域から海域に運搬される土砂の約7割がアジアとオセアニアの島嶼地域から運ばれていますが、大陸の大河川とほぼ同量の土砂が島嶼からもたらされています。今回の開催地であるボルネオ島は4000mを超える山々を有し、運搬される土砂量は年間9億トンと見積もられており、これは、長江、メコン河、紅河の土砂量を加えたよりも多い量です。よく研究されたマハカムデルタをはじめ、小規模ながら多くのデルタが見られます。これらの地域は、有名な油田地域でもあり、中新世のデルタなどの浅海堆積物が貯留岩となっていることから、現在のデルタ研究が活発に行われています。今回の会合では、オプショナルな巡検を含めると3つの完新世のデルタの巡検と陸上の中新統の

浅海堆積物の巡検が組まれています。なかなか見ることができない地形や堆積物ですので、是非この機会を利用してください。

スケジュール

1月13日：登録（ブルネイ着）

1月14日～16日：研究発表

1月17日～18日：バラムデルタとツゥルサンデルタの巡検（ブルネイとマレーシア）

1月19日～22日：マハカムデルタの巡検（オプション）（インドネシア）

基調講演

Dr. Peter McCabe (U.S. Geological Survey)

"Evolution of deltas over the last 150 m.y.: Understanding petroleum generation in large deltaic systems"

Dr. Justin Wilkinson (U.S. Geological Survey)

"Megafans and modern coastlines: New concepts from astronaut imagery of continental interiors"

Prof. Chuck Nittrouer (University of Washington)

"Recent advances in understanding river-delta-shelf systems in diverse settings"

Prof. George Pemberton (University of Alberta)

"The unique ichnological signature of deltaic deposits"

Prof. Joseph Lambiase (Universiti Brunei Darussalam)

"Depositional processes, facies, morphology and stratigraphic successions on Borneo deltas: Challenging the models".

ほか

登録料

300米ドル（要旨集，巡検費用，巡検中の1泊の宿代と14日から18日までの食事代を含む）

オプションツアー費用

300米ドル（宿代と食事代を含む．航空チケットは各自手配）

宿舎・ホテル（5泊必要）

大学のゲストハウス（2種類：1泊10米ドルと25米ドル）

ホテル（3種類：1泊40米ドル，55米ドル，210米ドル）

ブルネイまでの航空賃は，香港，バンコク，シンガポール，クアラルンプール経由になり，安いもので10万円強ほどです。

問い合わせ先：斎藤文紀（産業技術総合研究所）(yoshiki.saito@aist.go.jp)

_____ Welcome your visit to our NEW home pages _____

Asian Delta Home Page

<http://unit.aist.go.jp/igg/rg/coast-rg/ADP.html>

Yoshi Saito's Home Page

<http://staff.aist.go.jp/yoshiki.saito/>

We welcome your participation, IGCP-475 "DeltaMAP Project"

"Deltas in the Monsoon Asia-Pacific Region" (2003-2007)

3rd Annual Meeting will be held in Brunei

on January 13-18, 2006.

問い合わせ先：斎藤文紀（産業技術総合研究所）(yoshiki.saito@aist.go.jp)

第17回国際堆積学会議 (17th International Sedimentological Congress) 開催のお知らせ

国際堆積学会議は、国際堆積学協会 (International Association of Sedimentologists) が中心となって開催される国際会議で、4年に1回世界各地において開催されています。この度、東アジア地域で初めてとなる第17回国際堆積学会議 (ISC 2006) が、2006年に福岡において開催されます。日本第四紀学会も後援予定の学会の一つとして、関与しています。

本会議は、名称の通り「堆積学」に関連する幅広い分野の研究発表・情報交換の場です。会議には、「第四紀」研究にも関連した項目・内容がたくさん含まれています。第四紀学会関係者の研究成果を国際的に発表し、討論するよい機会となります。また、若手研究者の皆様には、世界の堆積学の動向を肌で感じる機会ともなります。多数の方々の参加をお待ちしています。本会議の日程等は以下のとおりです。なお、会議に関する詳細な情報やサーキュラーは、ウェブサイト (<http://www.isc2006.com>) より入手できます。

主催：国際堆積学協会・日本堆積学会・日本地質学会

開催日程：2006年8月27日(日)～9月1日(金)

場所：福岡国際会議場

メインテーマ：「From the Highest to the Deepest」

ヒマラヤからマリアナ海溝まで、様々な堆積環境・堆積過程が存在する東アジアの地形・堆積学的特徴を表すと共に、堆積学における世界最高レベルでの深い理解と探求、ならびに高い研究成果の追及を意味します。

科学プログラム：

それぞれの分野の第一人者による12の特別シンポジウムと、堆積学と関連する多様な分野をカバーする57のテクニカルセッション、野外巡検(韓国5、台湾2を含む計36コース)、ショートコース(6テーマ)、ワークショップ(2テーマ)が予定されています。是非、セカンドサーキュラーあるいはウェブサイト (<http://www.isc2006.com>) をご覧下さい。

重要日程：

1. 登録・要旨提出開始：2005年10月1日
申し込み先：<http://www.isc2006.com/>
2. 巡検・ショートコース・ワークショップ登録締切：2006年1月15日
3. 講演要旨提出締切：2006年2月28日
4. 講演要旨受理通知：2006年4月15日
5. ソーシャル・プログラム、宿泊予約、各種支払い締切：2006年5月1日

問合せ先：

〒110-0016 東京都台東区台東4-27-5 秀和御徒町ビル8F
近畿日本ツーリスト株式会社 ECハウス内
第17回国際堆積学会議組織委員会事務局
e-mail: isc2006-ec@or.knt.co.jp
FAX: 03-5807-3019

参加費用：

2006年5月1日以前：登録料 一般30,000円、学生10,000円、要旨投稿料12,000円
2006年5月2日以降：登録料 一般40,000円、学生15,000円

2005年松江大会巡検

中村唯史（島根県立三瓶自然館）

島根県の中ほどにある三瓶山。標高は1126m。それほど高い山ではないが、火山としての自然史、里山的利用とともに育まれた生態系と景観、出雲国風土記にある国引き神話に登場する神話の山、そして豊かな温泉と多彩な魅力に満ちた山である。2005年松江大会の巡検は、この三瓶山で行われた。コースは、三瓶火山の活動によって地中に埋もれた縄文時代の巨木が林立する「三瓶小豆原埋没林」、「三瓶自然館」、火山噴出物の露頭、火口を見下ろすピーク等。どちらかといえば観光旅行的なルートであるが、そこには多様な要素を持つ「三瓶山」を知ってもらいたいという企画側の思いがある。

巡検は8月29日午前9:00、JR大田市駅から出発した。参加者13名である。

最初に向かったのは三瓶小豆原埋没林公園。地下展示棟では、原位置のまま直立する埋没樹群と、押し倒された流木群を見ることが出来る。最長の埋没樹は、胸高直径2.2m、幹長12.5mのスギ。太さではこれを上回るものもあり、展示棟内だけで7本の埋没立木がある。ちなみに、発掘で確認されたものは30本。未確認のものを含めると、100本以上の埋没樹が存在すると思われる。ここでは縄文時代の奥深い自然と、火山活動が引き起こした現象を目の当たりにできるのだ。参加者の皆さんにも驚きを感じて頂くことができたのではないだろうか。

次は我が三瓶自然館。島根県の自然史博物館として、動植物と地学系の展示を行っているほか、天文台並の天体観測施設を有している。今回は時間の都合上、全てを見学して頂くことはできなかったが、島根県の鉱物資源や、日本海形成以降の自然史に関わる展示を案内した後、三瓶山の主峰、男三瓶を眼前に望む部屋で昼食をとって頂いた。

午後からは最初に三瓶火山の第4活動期以降の噴出物の地層が分布する露頭を訪れた。ゆるやかなスロープを描くシバ草原「西の原」の南西にある露頭で、黒色土壌を境にして、4期から7期の噴出物を見ることが出来る。三瓶火山噴出物の代表的な露頭である。ここでは、4期の噴出物について、遠隔地と山麓の層序対比に関心が集まった（表紙写真）。

続いて訪れたのは東の原。ここは冬はスキー場になり、リフトは夏期には観光用として運営されている。このリフトで大平山に登り、室内火口とそれを取り巻く峰々を展望した。三瓶山のピークは室の内を囲んで輪になっており、単一の峰が爆発的な噴火によって破壊されたという考えと、各ピークがそれぞれ別個の溶岩ドームとして形成されたという2通りの考えがある。この結論が出ていないことや、室の内の底にある噴気孔「鳥地獄」などを紹介した。その後、中国山地を遠望しながらリフトで下山し、記念撮影をしてから三瓶山を後にした。

解散地の出雲市駅および出雲空港へ向かう途中、2期の噴出物で覆われた「佐田横見埋没林」の発見地に寄り道した。5～7万年前と推定されており、最終氷期の植生を示す資料である。農道整備中に発見され、現在はのり面に数本の埋没樹が残されてシートで覆われている。一部露出した堆積物中には多量の火山豆石が含まれており、雨で洗われて豆石を敷き詰めたような状態をみる事ができた。

こうして、1日コースの短い巡検が終了した。案内者が火山そのものについて不勉強であったため、物足りなかったと思われるが、これに懲りず、また三瓶山へ足を運んで頂きたいと思う。



三瓶小豆原埋没林公園

2004年度研究委員会活動報告

2004年度は以下の5委員会が活動をおこなった。

層序・年代学研究委員会(委員長:三田村宗樹)

2003年7月に米国ネバダ州レノ市で開催された第16回INQUA大会で、それまでのCommissionが整理され5つに統合された。そのうちのひとつとして、従来のCommission on Stratigraphyを核として、Commission on Stratigraphy and Geochronologyが2003-2007 Inter-Congress periodのCommissionとして承認された(日本からは熊井がFull memberとして登録されている)。さらにこのCommissionに所属する次の5つのSubcommissionが承認された。

1. Tephrochronology & Volcanism (SCOTAV). Field meeting planned August 2005. President Chris Turney.
2. European Quaternary Stratigraphy (SEQS). Meeting planned for September 2005. President Mauro Coltorti.
3. Asian Quaternary Stratigraphy (SAQS). President Nadya Alexeeva.
4. Loess & Pedostratigraphy (SLAP). President Ludwig Zoeller.
5. Dryland Dating (SDD). Field meeting planned March 2005. President: Lewis Owen.

Commission on Stratigraphy and Geochronologyの最初のMeetingで、PresidentのProf. Brad Pillans(Australia)を中心にして従来の組織が検討され、従来のSubcommission of Asia and Pacific RegionはChronologyを含めて、Asian Quaternary Stratigraphy (SAQS)として継続することが承認された。このSubcommissionのPresidentにはロシアのDr. Nadya Alexeevaが推薦され了承された。INQUA大会終了後、この会に欠席だったDr. Nadya Alexeevaや従来のVice-Presidentと連絡しながら、新しいSubcommissionの再編成を行った。日本からはVice-Presidentに三田村宗樹が推薦された。2003-2007 Inter-Congress periodのSubcommissionの運営は従来どおり、Presidentを中心にして、幹事国である日本、中国、ロシアで原案を作成して、それをシンポジウムなどのおりに開催されるBusiness Meetingで決めて行こうということになった。

このSubcommissionの国内委員会として昨

年度から層序・年代学研究委員会が組織され、第四紀学会会員に呼びかけたところ、従来の層序アジア太平洋層序研究委員会からの継続を含めて、現在まで約20名の委員が登録されている。当面の活動としては、2006年9月にロシアのウランウデ市で開催されるSubcommission of Asia and Pacific Region主催のシンポジウム(詳しくは第四紀通信Vol.12 No.3 2005参照)の準備と独自の行事の策定などである。(熊井久雄・三田村宗樹)

海岸・海洋プロセス研究委員会(委員長:海津正倫)

本年度は次年度以降の活動のための準備期間として、スマトラ沖地震津波の調査など各メンバーが個人的に活動を進めた。

このため研究委員会としての活動費は請求しなかった。

テフラ・火山研究委員会(委員長:鈴木毅彦)

INQUA Commission on Tephrochronology (COT)は、1991年INQUA北京大会で承認されたCommissionであり、1987年に設立されたThe Inter-Congress Committee on Tephrochronology (ICCT)の流れを汲むものであった。1995年INQUAベルリン大会でのCommission on Tephrochronology and Volcanism (COTAV)への名称変更後も引き続き活動してきた。しかし2003年リノ大会をもってCOTAVは解散し、現在、COTAVは新しく組織された委員会であるStratigraphy and Chronologyのサブユニット(INQUA Sub-Commission for Tephrochronology and Volcanism: SCOTAV)として位置づけられている。

2004年度におけるテフラ・火山研究委員会の活動として、「関東平野の形成史 最近のテフラ・地下地質・テクトニクス研究に基づくその探究」と名づけたタイトルのもとに、3月中旬に一日間のシンポジウムと二日間にわたる野外集会を企画・開催した。シンポジウムは、地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会(日本学術会議)との共同主催として企画され、3月13日に明治大学駿河台キャンパスにおいて開催した。計10件の講演からなるシンポジウムは、午前の部がテフロクロノロジーを中心とした講演、午後の部は関東平野に関連した諸テーマの講演であった。参加者は約75名であった。シンポジウムの成果をもとにした印刷物を現在企画している。野外集会は3月14日

～15日の日程で、青梅、多摩丘陵、房総半島、銚子を対象とした野外巡検として開催され、これら地域の堆積物とテフラの露頭見学を行った。参加者は、案内者5人を含めた計36名であった。これらの詳細についてはいずれも第四紀通信第12巻3号に掲載されている。このほか、2005年7月31日～8月8日にカナダのユーコンにおいて、INQUA Sub-Commission for Tephrochronology and Volcanism (SCOTAV)による、International Field Conference and Workshop on Tephrochronology and Volcanism "Tephra Rush 2005"が開催される。日本国内からも多数の参加者があり、SCOTAVとの対応がなされる予定である。

ネオテクトニクス研究委員会(委員長:吾妻 崇)

ネオテクトニクス研究委員会では、主に1) INQUA Intensity Projectに関するビジネスミーティングと、2)2004年中越地震野外集會を開催した。

ビジネスミーティングは、2005年1月に兵庫県の北淡町で開催された北淡国際活断層シンポジウムにあわせて実施された。主な検討テーマは、INQUA Intensity Projectに対する日本における対応についてであった。INQUA Intensity Projectは、INQUA第16回大会(米国リノ市)においてPaleoseismicity小委員会で提案された、自然現象に基づいた世界共通の震度階を確立していく計画である。2004年8月にフィレンツェで開催された第32回IGCのビジネスミーティングにおいて日本に対する協力要請がなされ、北淡シンポジウムまでに対応方針を決めることとしていた。その会合にむけて、Paleoseismicity小委員会が準備しているチェックシートへの記入について研究委員会内で協力を依頼し、試験的に2004年中越地震、1995年兵庫県南部地震等の調査事例を作成、報告した。

野外集會は、昨年10月に発生した2004年新潟県中越地震の震源地周辺で行なった。2005年7月31日-8月1日にかけて2日間の行程で実施し、参加者数は案内者(吾妻 崇、太田陽子、鈴木郁夫)を含めて16名であった。この野外集會では、中越地震による強震動、液状化現象および地すべりによる災害と地表地震断層について現地討論を行うとともに、中越地方に分布する長岡平野西縁断層、長岡平野東縁断層、六日町断層帯、十日町断層帯を回り、活断層・活褶曲に関係した地形を観察し、活褶曲と活断層、そして地震発生との関係について議論

した。

高精度¹⁴C年代測定研究委員会(委員長:中村俊夫)

2005年3月末に、¹⁴C年代-暦年代校正データセットの最新版(INTCAL04)が発表された。旧版であるINTCAL98からの変更点を調べて、一般の¹⁴C年代ユーザーが利用し易くするために、研究委員会による公開シンポジウムの開催を検討したが、2005年の第四紀学会島根大会までに開催するに至らなかった。本年中に、INTCAL04の概要を理解して頂くための公開シンポジウムを開催したい。なお、島根大会のポスターセッションで、INTCAL04の概要を解説する予定である。

日本学術会議研連報告

地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会報告(委員長:岩田修二)

2004年8月の総会以降の活動を報告する。

1)2004年3月3日に第19期第5回、11月28日に第6回、2005年7月29日に第7回の委員会を開催した。

2)2005年10月に発足する日本学術会議の新体制については、新会員選出のための30人の会員候補者選考委員が選定され、そのもとに100名弱の選考を補佐する専門委員が選ばれた。地質・地球科学関係では、久城育夫氏が選考委員となり、その下に3人の専門委員(河野長・平 朝彦・鎮西清高の諸氏)が選ばれた。一方、各学協会には学術会議会員にふさわしい人の情報提供が求められた。2005年7月末には会員の推薦はほとんど終わったという情報が流れている。現在は、連携会員の選考が進められている。分野別特別委員会・交際学術団体対応委員会の案が出されている(詳細については別途報告の予定である)。

3)新地質年代表における「第四紀」の削除問題について「第四紀」を削除すべきではないという本委員会の意見を、英文の文書にして国際第四紀学連合・国際地質学会などに送った(和文文書は「第四紀通信」11(5)p.12-13に載せた)。

4)2004年11月28日に明治大学アカデミーコモンで「私たちの明日を考える:地球史が語る近未来の環境」を日本第四紀学会とともに主

催した。100名ちかくの参加者があった。このシンポジウムの内容にもとづいて、東京大学出版会から一般向けの単行本「地球史が語る近未来の環境 - 地球環境の可能性を読む(仮題)」を第四紀学会50周年記念事業の一環として出版する。編集作業が進んでいる。

5) 太平洋学術会議が2007年に沖縄で開催されることが決定した。

6) 国際惑星地球年(IYPE)が一年遅れで2007-2009年に実施されるように準備が進められている。テーマは「社会のための地球科学」。

7) 2005年1月18-24日に開催された「北淡国際活断層シンポジウム」を地質科学総合研連として共催した。

8) シンポジウム「関東平野の形成史 最近のテフラ・地下地質・テクトニクス研究に基づくその探究」(平成17年3月13日明治大学)を日本第四紀学会テフラ・火山研究委員会とともに主催した。

9) 時限付科学研究費について、平成19年度分に提案・応募する件について検討した。

10) 第19期の本委員会の活動の総括をおこなった。これは、日本学術会議の体制が2005年10月以後、全く新しくなるために、新組織に、これまでの活動を継続させることをねらったものである。総括の文書を作る。内容は、第四紀学の意義と重要性をのべ、今後の課題を指摘したものとなる。また、それをどういう形で公表するかについても議論した。

古生物学研究連絡委員会報告(河村善也委員)

古生物学研究連絡委員会では、この1年間に下記のように、委員会を2回とシンポジウムを1回開催した。

1) 委員会：第4回委員会 2004年12月20日(月)、第5回委員会 2005年4月21日(木)
これら委員会では以下のことが報告・審議された。

1. 学術会議に関する報告が小松正幸会員から行われた。
2. 今秋以降に発足する新しい日本学術会議をめぐる動きについての報告と意見交換が行われた。
3. タイプ標本やその他の自然史関連の標本が危機的な状況にあり、その状況を打開するための方策を検討し、19期委員会のまとめとして具体的な提言を行うことになった。
4. 国際惑星地球年(IYPE)について、しばらくは国内では様子見の状況である旨の報告があり、意見交換が行われた(会長国の中国が国連に提案しなかったため)。

5. 今秋以降の学術会議の組織は未定であるが、今後引き継ぐ課題(古生物関連の国際機関との連携、標本の問題、博物館学芸員の待遇の問題など)について、任期内にさらに議論を深めることになった。

2) シンポジウム：「人為的な環境擾乱の指標としての生物 - 過去の環境変動に対する古生物の応答に関する研究からの提案 - 」というタイトルで2004年10月12日(火)に日本学術会議大会議室を会場として行われた。内容は沿岸生態系を取り巻く海洋環境に関する講演が3題、生態系と海洋環境について現生生物と化石からのアプローチに関する講演が3題、生態系から復元される近過去の陸域と海洋の環境について有明海や八代海で行われた研究に関する講演が4題で、これらの講演の後、微小生物の研究に期待するものというテーマで総合討論が行われた。

選挙管理委員会報告

(委員長：植木岳雪)

2005-2006年度評議員・役員選挙の運営を以下のように行った。委員会は幹事会より推薦された、植木岳雪、江口誠一、及川輝樹、大石雅之、近藤 恵、白井正明の各委員で構成され、互選により植木岳雪委員が委員長に就任した。

評議員選挙は全会員を有権者にして投票が行われ、5月28日の開票で43名の評議員が選出された(評議員会報告資料(9)参照)。次いで新評議員を有権者にした役員選挙が行われ、6月25日の開票で、会長に町田 洋、副会長に真野勝友、会計監査に岩田修二、松浦秀治、幹事に池原 研、奥村晃史、久保純子、斎藤文紀、鈴木毅彦、兵頭政幸の各会員が選出された(なお、評議員に2名の辞退者が生じたため、繰り上げが行われた)。

電子メールにて投票を数回呼びかけたにもかかわらず、投票率は前回よりやや上昇しただけであった(投票率14%)。その原因として、投票の煩雑さ・複雑さが上げられる。特に自分の所属と異なる分野の投票が難しいと思われる。投票をしやすくするためには、必ずしも全部の欄を埋める必要がないことを強調して説明する、電子投票の導入を図る、あるいは各分野2名ずつの投票にするなどの意見が出された。

学会倫理憲章策定委員会報告

2004年7月、評議員5名(上杉 陽・遠藤邦彦・菊地隆男・小泉武栄・海津正倫)より「倫理憲章策定委員会(仮称)設置」の提案が会長宛にあり、8月評議員会において、設置が承認された。

2005年1月、幹事会は当該委員会の規約と人事構成の大枠を決定し、委員を一般会員から2名、幹事会から2名とした。分野構成をも加味して、委員候補を上杉 陽、坂上寛一、真野勝友、小野 昭とした。委員候補は他学会の倫理綱領などの関連情報の収集を開始し、本学会

倫理憲章の基本骨格を検討した。2月評議員会は委員会規約と委員を承認した。委員長は互選の結果、上杉 陽となった。委員会は検討を重ね、4月30日付けで会長(幹事会)宛てに最終原案を答申した。

会長(幹事会)は5月9日付けで、会長名を持って、第四紀通信12巻3号に「日本第四紀学会倫理憲章(案)」および「会則一部改正案」を会員に提示し検討を求めた。

本案件は幹事会より2005年度評議員会・総会に提案される。

日本第四紀学会学会倫理憲章

2005年8月26日の評議員会・8月27日の総会(島根大会)において学会倫理憲章の策定が承認されました。会員は倫理憲章を遵守する義務を負うことが会則にも追加されましたのでお知らせいたします。

日本第四紀学会倫理憲章

前文

本会は、人類を産み育ててきた地球の環境変動を、人類が地球に与えてきた様々な影響とともに科学的に調査研究し、成果を広く社会に普及する事を目的とする。また、内外の関連学協会と協調し、人類社会の持続的発展と地球環境及び生物多様性の保全に貢献することを希求する。

1. 科学者・教育者としての倫理

会員は、専門知識と技術の向上をめざして自己研鑽を図るとともに、本学会を構成する諸分野の相互理解にも努める。調査研究および教育普及にあたっては、基本的人権の尊重の上にたって、法を遵守し社会的良識に従って行動する。

2. 知的交流の促進

会員は、得られた成果が広く吟味・検証されるべく努め、専門知識と技術を活用して他分野との交流を促進する。また、調査研究の公表にあたっては先行研究と他者の業績を正當に評価する。

3. 人類社会への責務・地球環境への責務

会員は専門的な知識や立場を活かし、地球環境の過去・現在・未来について、社会に対する適切な情報提供に努める。自らの調査研究の実施にあたっては、環境への影響を適切に評価し、影響を最小限に押さえるべく努め、地域の人々の信頼と尊敬を獲得するべく努力する。

4. 次世代への責務

会員は、次世代を担う人材の育成に努めるとともに、調査・研究の成果物、標本、試資料、露頭、遺跡、景観など、諸遺産の保護・保全に努める。

50周年記念事業実行委員会報告

50周年記念事業実行委員会：熊井久雄（委員長）真野勝友、山崎晴雄、鈴木毅彦、岩田修二、斎藤文紀、河村善也、渡邊真紀子、御堂島 正、遠藤邦彦、杉山雄一、久保純子、中村俊夫、吉川周作。

50周年記念事業として以下の内容を計画・準備した。

1) 2004年11月に実施した第四紀研連主催のシンポジウム「地球史の現代と近未来 - 自然と人類の共存のために」を、日本第四紀学会50周年記念出版物として東京大学出版会より刊行することを決定した。世話人：町田 洋・岩田修二・小野 昭。現在、原稿執筆・編集中。

2) 50周年第四紀電子出版編集委員会（委員長：遠藤邦彦、委員：吾妻 崇、奥村晃史、正田浩司、鈴木毅彦、内記昭彦、原口 強、中村俊夫、百原 新、小野 昭、三浦英樹、堀 和明）は電子出版物の目次案・執筆項目を提示し、執筆分担者を決定した。現在、執筆・編集中。

3) 第四紀学会50周年記念の博物館行事：河村委員が中心になり、第四紀学会創立50周年を記念していくつかの自然史系博物館に対し特別展実施について交渉を行った。大阪市立自然史博物館については2006年に共催行事を実施予定であったが、2005年夏に急遽ティラノザウルス(T.rex スー)の特別展が入ったために、共催行事実施できなくなった。しかし、豊橋市立自然史博物館、兵庫県立人と自然の博物館、および産総研地質標本館については共催が可能となり、現在、展示にむけて具体的な協議を行っている。

4) 国際シンポジウム：東アジアおよび東南アジアの第四紀研究者との連携を図るため、国際シンポジウム「アジア・太平洋の第四紀 - 環境変化と人類 - 」を2007年8月に開催することを決定した。開催地は茨城県つくば市の産業技術総合研究所、時期は2007年8月20-22日頃を予定している。なお、会場経費等は受益者負担を原則として参加者からの参加費でまかなうが、海外の研究者、とくにアジア地域の研究者を招待するための資金が必要である。経費は、科研費の国際研究集会等の獲得を目指すと共に、会員からの募金で賄うことを考えている。これら事業を実施するため50周年記念事業実行委員会の中に新たに国際シンポジウム実行委員会を設置する。

5) 募金について：2005年2月20日の評議員会で幹事会より募金実施についての提案を行い、承認された。2005年総会で承認を得た後、郵便振替口座開設、事務体制等の準備を行な

い、第四紀通信等を通じて会員に周知して募金を開始する。開始時期は2005年12月を目標とする。目標額は500万円で、募金を促進するため2口（一口5000円）以上の募金者に記念品を進呈する予定。

6) 国際シンポジウム実施に関して、独立行政法人産業技術総合研究所との共催について内諾が得られた。実施会場もつくば産総研内の会議場が使用可能となる見込み。今後、事務手続き等について具体的に打ち合わせて実施体制を整える。

7) 2006年大会・総会は東京都八王子市の首都大学東京で実施する。時期は8月後半の国際堆積学会との重複を避け、2006年8月4～7日頃（日数は未定）に実施する。

8) 記念式典を2006年大会の懇親会と併せて実施する。会場は学外のホテル・宴会場を計画している。なお、記念式典では会長講演・来賓挨拶の他、名誉会員の推薦、功労者の表彰等を計画している。

9) 記念シンポジウムの実施：2006年大会シンポジウムは通常の大会と異なり、第四紀学会の歴史を振り返り、将来への展望を開くシンポジウムを実施したい。学会関係者以外からの依頼講演等を考えているが内容未定。

10) その他：幹事会と協力して創立50周年を機に、高齢会員の退会に歯止めをかける諸施策を実施する。会費の割引、シニア会員制度の設置、功労者の表彰制度等を検討する。

50周年記念事業に関わる募金の実施について（予告）

2005年8月26日の評議員会、ならびに8月27日の総会において、50周年記念事業に関わる募金の件が承認されました。会員の皆様には改めて振り込み方法等をご案内いたしますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます（幹事会）。

日本第四紀学会では2006年4月に創立50周年を迎えることから、50周年記念事業実行委員会を発足させて準備活動を進めているところです。この事業では、記念出版物の刊行、記念式典、記念シンポジウム、国際シンポジウムの実施等を検討しています。

財政的に非常に厳しい折、諸行事はできるだけ簡素に、そして受益者負担の原則で実施する所存ですが、国際シンポジウムにつきましては2007年INQUA大会の招致を逃したこともあり、日本の第四紀学を世界へ展開させるために、そして、アジア地域の第四紀研究との連携

をはかるため、また、未加盟のアジア各国に INQUA への加盟を促すため、シンポジウムのタイトルを「アジア・太平洋の第四紀 - 環境変化と人類 - 」として、各国の代表等を招いて 21 世紀にふさわしい会合を開催したいと思えます。開催時期は 2007 年 8 月 20 ~ 22 日（前後に巡検等も計画）で、開催地は茨城県つくば市、独立行政法人産業技術総合研究所との共催で実施する予定です。

しかし、INQUA やアジア各国の代表を物価の高い日本に招待するためには、その旅費及び滞在費を日本第四紀学会が負担する必要があります。この金額は 15 名程度を招待するとしても、一人あたり 30 万円、合計 450 万円程の資金が必要です。その他の記念事業でも受益者負担とは言え、不足額が生じた場合は第四紀学会が資金提供を行う必要があります。日本第四紀学会では国際研究会開催の科研費申請等を行う予定ですが、競争が激しい中でどれだけの資金が確保できるか不透明です。また、ご承知のように、2004 年 8 月の（財）日本学会事務センターの破産により日本第四紀学会は預け金約 320 万円の回収が不可能になりました。このため学会ではこれまでの資産を取り崩して学会運営に充てている状況であり、記念事業のための資金を捻出することは財政的に不可能です。このため、幹事会では国際シンポジウムを含めた 50 周年記念事業の実施に必要な資金を得るため、下記の要領で募金を実施いたしたく、2005 年総会に提案する次第です。

記

募金目標：500 万円（1 口 5000 円：2 口以上
納入された方には記念品贈呈）
呼びかける対象：日本第四紀学会会員
募集開始時期：2005 年 12 月を予定（募金広告
を第四紀通信等に掲載します）

博物館連絡委員会設置について

2005 年 8 月 26 日の評議員会・27 日の総会において、標記の特別委員会の設置が承認されましたのでお知らせします。

現在、日本第四紀学会会員のうち博物館・資料館・郷土館・埋蔵文化財センターなど博物館相当施設に勤めている会員が 90 名以上居て、会員全体に対する比率も 5% 以上に達している。

これまでの学会の広報普及活動を見ると、鳥取県立博物館、神戸市教育研究所、大阪市立自然史博物館、福岡市博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館や千葉県立中央博物館など、大学以外の場所を会場として学術大会・総会、シンポジウム、講演会、研修会などが行われている。これらはいずれもこれらの施設と共催で実施されて来た。このように、第四紀学会と博物館（上記博物館相当施設を含む、以下同様）との連携は年々進展している。この連携をさらに強めて、第四紀学会の広報活動と博物館の教育普及活動双方を発展させる活動が望まれる。そのために、博物館に所属している第四紀学会会員の緊密な連絡体制構築が必要であり、このような体制を構築するための特別委員会の設置を提案する。

学際的に第四紀を扱う学会として博物館を軸とした活動を発展させることは、市民に自然科学と人文科学とを合わせた学際的な視点を提供する良い機会でもあると考えられる。

・特別委員会委員予定

委員長 松島義章（元神奈川県立生命の星・地球博物館）
委員 赤松守雄（北海道開拓記念館）
石井久夫（大阪市立自然史博物館）
右代啓視（北海道開拓記念館）
梅田美由紀（福井市自然史博物館）
江口誠一（千葉県立中央博物館）
近藤洋一（野尻湖ナウマンゾウ博物館）
佐藤裕司（兵庫県立人と自然の博物館）
島口 天（青森県立郷土館）
高橋啓一（滋賀県立琵琶湖博物館）
田口公則（神奈川県立生命の星・地球博物館）
樽 創（神奈川県立生命の星・地球博物館）
中尾賢一（徳島県立博物館）
中村唯史（島根県立三瓶自然館）
吉川博章（豊橋市自然史博物館）

・当面の活動予定

- 1) メールによる情報交換（メーリングリスト活用）
- 2) 第四紀通信に博物館紹介や特別展のお知らせ、所蔵資料などを掲載
- 3) 会員名簿に主な博物館など関連施設を掲載
- 4) 大会時などに会合を持ち、今後の行事など行動計画を話し合う

2005年度第1回評議員会議事録

日時：2005年8月26日(金)17:30-19:30
 場所：島根大学総合理工学部3号館3階301教室
 議長：吉川周作
 出席：熊井久雄(前会長)、町田 洋(会長)、
 真野勝友(副会長)、池原 研、石橋克彦、上杉
 陽、奥村晃史、河村善也、久保純子、公文富士
 夫、鈴木毅彦、陶野郁雄、中村俊夫、松下まり
 子、兵頭政幸、松浦秀治、水野清秀、吉川周作
 (以上評議員)、山崎晴雄(前幹事長)、菊地隆男
 (会計監査)、遠藤邦彦
 記録：久保純子

山崎前幹事長の司会で熊井前会長挨拶の後、吉川周作評議員を議長に選出し、配付資料にもとづき下記の報告・審議がおこなわれた(各報告は2004年度の担当幹事がおこなった)。

報告事項

1. 2004年度事業報告

1-1 庶務(久保幹事)

1) 事務局の移転：2004年8月17日、日本第四紀学会が事務委託していた(財)日本学会事務センターが破産し、預かり金約325万円が回収不能となったほか、学会業務に多大の損害を受けた。このため幹事会は暫定的に業務を引き継いだ。2004年12月に新しい業務委託先として(株)春恒社を選定し、事務局を移転するとともに学会業務を再開した(2004年度第2回評議員会議事録参照)。

2) 会員動向(2005年7月31日現在)：正会員1665名(うち学生費会員67名、海外会員18名を含む)、名誉会員4名、賛助会員13社、団体会員95団体。逝去会員：坂本 亨(逝去日2004年5月16日)、那須孝悌(旧評議員、逝去日2004年11月25日)、柴崎達雄(旧評議員、逝去日2005年1月4日)、国分直一(逝去日2005年1月11日)。

(参考)2004年7月21日現在の正会員1708名(うち学生費会員43名、海外会員18名を含む)、名誉会員4名、賛助会員13社、団体会員99団体。

2005年4月より個人情報保護法完全施行にともない、「第四紀通信」への会員消息の掲載は氏名と所属のみとした。

3) 総会・評議員会・幹事会の開催：2004年度第1回評議員会を2004年8月27日に山形大学において開催した。出席者23名、委任状21通。議長：松島義章。2004年度総会を2004年8月28日に山形大学において開催した。出席者67名、委任状129通。議長：岡田篤正。これらの議事録は「第四紀通信」11巻5号に掲載した。2004年度第2回評議員会を2005年2月20日に千葉県立中央博物館において開催した。出席者18名、委任状14通、議長：犬塚則久。議事録は「第四紀通信」12巻2号に掲載した。このほか、幹事会を計8回開催し、議事録をそれぞれ「第四紀通信」に掲載した。

4) 引用許可の受付(6件)と寄贈図書(7機関12冊)。

5) 学会・シンポジウム等の共催・後援：第48回粘土科学討論会(共催)2004年9月16~18日新潟大学、日本学術会議地質学総合研連第四紀学専門委員会シンポジウム「私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境」(共催)2004年11月28日明治大学、地球惑星科学関連学会2005年合同大会(共催)2005年5月22~26日幕張メッセ、那須孝悌追悼シンポジウム(後援予定)2005年9月3日大阪市立自然史博物館、第17回国際堆積学会議(後援予定)2006年。

6) 2005-2006年度評議員・役員選挙：選挙管理委員会を組織し、その運営を依頼した。委員会は幹事会より推薦された、植木岳雪、江口誠一、及川輝樹、大石雅之、近藤 恵、白井正明の各委員で構成され、互選により植木岳雪委員が委員長に就任した。選挙結果については5.選挙管理委員会報告を参照。

7) 2005年日本第四紀学会論文賞受賞候補者選考委員会：論文賞受賞候補者の推薦について会員に周知するとともに、評議員による論文賞候補者選考委員の選挙を実施した。熊井久雄会長から推薦された11名の候補者に対し、5名(阿部祥人、岩田修二、辻 誠一郎、兵頭政幸、福澤仁之の各会員)が選考委員として選出され、評議員会で承認された。委員の互選により、岩田修二会員が委員長に就任し、選考作業をおこなった。委員会による選考結果は、6.の論文賞受賞候補者選考委員会報告を参照。

8) 旧石器捏造資料に関連する日本第四紀学会刊行物の調査結果の公表：2002年8月の松本大会の後、「旧石器遺跡捏造事件」に関する資料調査WG(小野 昭、伊藤 健、佐藤宏之、鈴木毅彦、諏訪間順)を立ち上げ、調査をおこなった。調査結果(資料リスト)は「第四紀研究」44巻3号および「第四紀通信」12巻3号紙上に公表した。

9) (財)日本学会事務センター破産に関連して、センター元理事らが示した約5000万円の和解金に対し、破産被害学会が和解交渉委員会を組織して交渉を進めた結果、日本第四紀学会は預け金損失額を基準とした和解金96,004円を受け和解した。

会員数の減少についての質問に対し、近年は定年退職時に退会する会員が多く、何らかの対策が必要との回答があった。

1-2 行事(斎藤幹事に代わり庶務幹事が報告)

1) 日本第四紀学会2004年大会を山形大学において2004年8月27日~30日に開催した。8月27日~28日に一般研究発表を行い、口頭36件、ポスター32件、合計68件の研究発表が行われた。また27日夕方に評議員会、28日に総会を行った。8月29日には、「活構造と盆地の形成」のシンポジウムを開催し、8件の発表が行われた。また、28日の午後には、山形国際ホテルにおいて、普及講演会「活火山と活断層、山形は大丈夫？」を山形県と共催した。大会の参加者は、実行委員を除いて、163名、シンポジウムでは、138名、普及講演会では310名であった。また、8月29日~30日に巡検「新庄・山形盆

地のテフロクロノロジーと活断層」を実施し、定員満杯の盛況であった。

2) 日本第四紀学会 2005 年大会の準備を行った。大会は、島根県松江市島根大学において、一般研究発表・総会を 2005 年 8 月 26 日(金)と 27 日(土)に、シンポジウムと普及講演会を 8 月 28 日(日)に、野外見学会は 8 月 29 日(月)に開催する。実行委員会は木村純一委員長を中心として島根大学を中心とする会員により構成され、準備が行われている。シンポジウムは島根大学汽水域研究センターと共催で「汽水域における完新世の古環境変動：自然環境の変遷と人為改変による環境変化」、普及講演会は「人は自然環境にどのように向き合うのか - 過去から現在、未来まで - 」のタイトルで実施される。野外見学会は、福岡 孝・中村唯史会員の案内による「三瓶火山と三瓶小豆原埋没林」である。

1-3 編集(池原幹事)

1) 第四紀研究第 43 巻 5 号(原著論文 2 編、短報 5 編、書評 2 編、72 ページ)、6 号(原著論文 3 編、短報 2 編、書評 3 編、74 ページ)、第 44 巻 1 号(原著論文 2 編、短報 1 編、総説 1 編、書評 2 編、78 ページ)、2 号(原著論文 2 編、短報 2 編、書評 2 編、52 ページ)、3 号(原著論文 3 編、短報 2 編、書評 1 編、旧石器捏造資料に関連する日本第四紀学会刊行物の調査結果について、60 ページ)、4 号(特集号：原著論文 5 編、口絵、84 ページ(口絵込))の合計 6 冊 420 ページを刊行した。前年度より 59 ページ減である。

2) 7 月 24 日現在、受理済み論文は 4 編で第 44 巻 5 号以降に順次掲載の予定である。論文投稿数は、2005 年に入ってから 23 編(書評を除く)で、昨年の同時期と同数である。しかし、2004 年に投稿された 38 編の論文(原著・短報・総説)のうち、10 編が掲載不可あるいは取り下げとなっており、2005 年に入ってから受理原稿数の減少が目立つようになった。第 44 巻各号の印刷ページの減少はこのような受理原稿数の減少を反映している。一方で、完成度の高い論文は投稿受付から刊行まで 8 か月程度であった。

3) 編集状況や問題点は「編集委員会だより」を通じて、会員に知らせるように努めた。また、完成度の高い論文の作成を「編集委員会だより」にて呼びかける一方、2004 年山形大会において編集委員会ブースを設け、原稿の受付から刊行に至る流れや分かりやすく明解な図表の作り方などを解説した。2005 年島根大会においても同様の活動を行うこととした。また、第四紀研究第 44 巻 3 号に投稿から論文掲載までの原稿の流れの図を掲載した。

4) 電子ジャーナル化のための問題点について検討した。また、現状の編集作業にあわせた投稿規定、執筆要項の改定について検討し、改定案を作成した。投稿規定改定については 8 月 26 日の評議員会に提案予定であり、執筆要項改定については 8 月 11 日の幹事会において承認された。

投稿から受理まで最短で約 8 ヶ月との報告に対しさらに短縮できないかとの質問があり、最短記録は短縮されていること、また次の編集委員会までの間

の投稿原稿の処理も迅速におこなわれているとの回答があった。

1-4 広報(兵頭幹事)

1) 「第四紀通信(QR Newsletter)」Vol.11 No.5(2004 年 10 月)と Vol.11 No.6(2004 年 12 月)、Vol.12 No.1(2005 年 2 月)、Vol.12 No.2(2005 年 4 月)、Vol.12 No.3(2005 年 6 月)、Vol.12 No.4(2005 年 8 月)を刊行した。

2) 学術情報センターのインターネット WWW サーバ上の日本第四紀学会ホームページを通じて広報活動を行った。

3) 「第四紀通信(QR Newsletter)」の Vol.11 No.5-6、Vol.12 No.1-4 を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。

4) 第四紀学会一般会員を対象とした学会メーリングリストを開設し、広報活動を行った。また、幹事会用のメーリングリストも開設し、事務連絡の効率化をはかった。

1-5 渉外(奥村幹事)

1) 地球惑星科学関連学会合同大会：2005 年合同大会において、第四紀学会としてレギュラーセッション「第四紀」を、また地震学会・地質学会と共催で「活断層と古地震」を提案し採択された。2005 年 5 月 22 日～26 日に千葉市幕張メッセ国際会議場において開催され、セッションは無事終了した。「第四紀」の発表数は合計 21(オーラル 11、ポスター 10)、「活断層と古地震」の発表数は合計 37(オーラル 12、ポスター 25)であった。2006 年合同大会は 5 月 14 日～18 日に千葉市幕張メッセ(国際会議場)で行われる予定である。種々の情報は合同大会公式ウェブサイト(<<http://epsu.jp/jmoo2006>><http://epsu.jp/jmoo2006>)で提供される。

2) 地球惑星科学関連学会連絡会：2004 年 10 月 12 日に東京大学地震研究所にて開催され、2004 年合同大会の会計報告、2005 年合同大会の準備状況などについて審議され承認された。2005 年 5 月 26 日に幕張メッセ国際会議場で開催された拡大連絡会では、2005 年大会の速報、日本地球惑星科学連合の設立、地学教育委員会の運営等について審議が行われた。

3) 連携のあり方に関する検討ワーキンググループ：2004 年 6 月 19 日、7 月 24 日、10 月 30 日の 3 回の会合を通じて地球惑星科学関連学会の連携について議論し、日本地球惑星科学連合設立準備会の設置を承認した。

4) 日本地球惑星科学連合設立準備会：2004 年 10 月 30 日に発足し、12 月 4 日、2005 年 1 月 10 日、2 月 5 日に会合を開いて、新しい日本学術会議会員に関わる情報提供への対応、連合の組織・体制、運営方針について審議を行った。

5) 日本地球惑星科学連合：2005 年 5 月 25 日に幕張メッセ国際会議場で拡大評議会を開催して、評議会長の選出、規約の承認、運営会議委員の承認、今後の運営方針の承認が行われ、正式に発足した。日本第四紀学会からは、熊井久雄会長が評議員をつ

とめるほか、2名の会員が常置委員会に自発的に参加して運営を補助している。

6) 自然史学会連合関連：2004年12月4日に国立科学博物館新宿分館資料館にて自然史学会連合総会が開催され、決算報告・ホームページ・地域博物館での研究活動などの報告と、予算・2005年度のシンポジウム開催の是非などについて審議が行われた。また、同日午後は、シンポジウム「日本の自然史 - 多様な生き物たちのエピソード - 」が開催された。

7) 地質科学関連学協会、地球環境科学関連学科協議会については報告事項なし。

8) 国際惑星地球年(IYPE)の国内委員会に参加して活動を行った(斎藤行事幹事が担当)。国際惑星地球年は、当初2006年を中心として2005年~2007年の3ケ年で準備が行われていたが、2004年の国連提案が行われなかったため、2005年10月提案に向けて準備が行われている(ユネスコ理事会の承認済)。期間は、2008年を中心として2007年~2009年の3ケ年に修正されている。

1-6 企画(河村幹事)

1) 「ナウマンゾウがいた頃」というテーマのシンポジウム(従来ミニシンポジウムと呼んでいたものを改称)を企画し、千葉県立中央博物館と共催で2005年2月20日(日)に同博物館で開催した。このシンポジウムは、千葉県袖ヶ浦市吉野田の約20万年前の地層(下総層群清川層)から最近発見されたナウマンゾウ化石やそれに伴う多数の化石の研究成果と、それらの化石の産出層やそれに関連する地層の研究成果をまとめて発表するために、同博物館が中心となって企画されたものである。参加者は113名でたいへん盛況であった。研究発表は9題もあり、そのあと総合討論が行われた。このシンポジウムでは化石そのものばかりでなく、古環境や古生態についても詳しい研究発表が行われ、第四紀の研究にふさわしい学際的で大変興味深いシンポジウムであった。このシンポジウムで、ナウマンゾウがいた当時の日本の自然環境や生物相についての理解が深まった。

2) 第9回日本第四紀学会講習会を「第四紀脊椎動物化石の基礎知識と研究法」というテーマで企画し、2005年5月29日(日)に大阪市立自然史博物館を会場に開催した。講師は同博物館の樽野博幸氏と企画担当幹事の河村の2名で、参加者は15名であった。この講習会では、マンモス、ナウマンゾウ、オオツノジカなどを含み、一般にも関心の高い第四紀脊椎動物化石を取り上げて、講義ばかりでなく実物標本の観察、博物館展示の見学、化石抽出の実習などを行って、参加者に第四紀脊椎動物化石に対する理解を深めてもらうように努めた。具体的な内容は1.脊椎動物の骨格の基本構造の解説、2.脊椎動物の歯の基礎知識の解説、3.脊椎動物化石の研究法、4.第四紀層からよく発見される脊椎動物化石の解説、5.展示室での標本・レプリカの観察、6.遺跡の堆積物を用いた化石抽出の実習であった。参加者は皆、大変熱心で活発な質疑応答が行われ、大変有意義な講習会となった。

2. 2004年度決算報告・会計監査報告(資料(1)~(3)参照)

松浦幹事より資料(1)(2)の決算報告、ついで菊地会計監査より資料(3)の会計監査報告があった。そのさい、学会事務センターのときの懸案事項であった預け金制度が現在は解消したとの補足説明があった。

3. 研究委員会報告(本誌「2004年度研究委員会活動報告」参照)

2004年8月に総会で承認され発足した研究委員会は以下の5委員会であり、各委員長からの活動報告を庶務幹事が資料により説明した。

- 3-1 層序・年代学研究委員会
- 3-2 海岸・海洋プロセス研究委員会
- 3-3 テフラ・火山研究委員会
- 3-4 ネオテクトニクス研究委員会
- 3-5 高精度¹⁴C年代測定研究委員会

4. 日本学術会議研連報告(本誌「日本学術会議研連報告」参照)

4-1 地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会報告(委員長:岩田修二)

岩田委員長の報告資料が示され、町田研連委員より補足説明があった。

4-2 古生物学研究連絡委員会の報告(河村善也委員)

河村委員より資料にもとづき報告がおこなわれた。

5. 選挙管理委員会報告(本誌「選挙管理委員会報告」参照)

庶務幹事より資料にもとづき選挙管理委員会の活動と選挙結果が報告された。

6. 論文賞選考委員会報告(本誌「2005年日本第四紀学会論文賞」参照)

岩田委員長に代わり、庶務幹事より選考結果が報告された。

7. 学会倫理憲章策定委員会報告(本誌「学会倫理憲章策定委員会報告」参照)

上杉委員長より資料にもとづき活動報告があった。

8. 50周年記念事業実行委員会報告(本誌「50周年記念事業実行委員会報告」参照)

山崎幹事より資料にもとづき報告があった。

審議事項

1. 2005年度事業計画

各幹事より評議員会・総会資料にもとづき説明があり、いずれも承認された。

1-1 庶務

1) 会員名簿の管理をおこなう。

- 2) 総会・評議員会・幹事会を開催する。
- 3) 引用許可・受け入れ図書の整理をおこなう。
- 4) 学会・シンポジウム等の共催・後援をおこなう。
- 5) 論文賞選考委員会を組織する。
- 6) 50周年記念行事を実行委員会とともに準備・遂行する。

1-2 行事

- 1) 2005年8月26日～29日に島根大学において予定されている日本第四紀学会2005年大会を開催する。
- 2) 日本第四紀学会2006年大会を日本第四紀学会50周年記念行事と兼ねて首都大学東京において2006年8月に開催する準備を行う。
- 3) 2007年日本第四紀学会大会の開催地選考の準備を行う。

1-3 編集

- 1) 「第四紀研究」第44巻5号、6号、第45巻1号、2号、3号、4号を編集し、定期刊行する。
- 2) 2005年大会シンポジウム特集号編集委員会を設置し、企画・編集などにあたる。
- 3) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。特に、電子ジャーナル化について検討する。

1-4 広報

- 1) 第四紀通信(QR Newsletter) Vol. 11 No. 5 (2004年10月)、Vol. 11 No. 6 (2004年12月)、Vol. 12 No. 1 (2005年2月)、Vol. 12 No. 2 (2005年4月)、Vol. 12 No. 3 (2005年6月)、Vol. 12 No. 4 (2005年8月)を刊行する。
- 2) 学術情報センターネットWWWサーバー上の日本第四紀学会ホームページを通じて広報活動を行う。
- 3) 第四紀通信(QR Newsletter) Vol. 11 No. 5～6、Vol. 12 No. 1～4を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。
- 4) 第四紀学会のメーリングリストの運用。

1-5 渉外

- 1) 地球惑星科学関連学会合同大会を引き続き共催し、単独で組織する第四紀セッション、共同で組織する活断層・古地震セッション等を継続する。
- 2) 日本地球惑星科学連合の加盟学会として、関連他学会と協調して活動をすすめる。
- 3) 第四紀学会としては、加盟学会連合である自然史学会連合、地質科学関連学協会、地球環境科学関連学会協議会に積極的に参加し、その活動の一翼を担う。
- 4) 国際惑星地球年(IYPE)に関する国内委員会の活動を行う。

1-6 企画

- 1) 1月の評議員会に合わせてシンポジウムを開催する。テーマは検討中。
- 2) 今年度内に講習会を開催する。テーマは検討中。

2. 2005年度予算案(資料(4)～(6)参照)
松浦会計幹事より資料(4)(5)(6)にもとづき説明があり、原案通り承認された。

3. 50周年記念事業に関わる募金の実施(本誌「50周年記念事業に関わる募金の実施」参照)
山崎幹事長より資料に示す幹事会案が提示され、原案通り承認された。

4. 学会倫理憲章の策定(本誌「日本第四紀学会倫理憲章」参照)

庶務幹事より資料にもとづき学会倫理憲章案が示され、以下の説明の上、原案通り(会則の改正は次項で審議)承認された。

幹事会では「第四紀通信」12巻4号に学会倫理憲章(案)を掲載し、会員の意見を求めました。その結果寄せられた意見を検討し、以下に示す倫理憲章の策定と、それにとまなう会則第5条の改正(審議事項5.)を提案します。

(前回からの変更箇所:下線部)

前文

本会は、人類を産み育んできた地球の環境変動を、……

3. 人類社会への責務・地球環境への責務
会員は専門的な知識や立場を活かし、地球環境の過去・現在・未来について、社会に対する適切な情報提供に努める。

5. 会則の一部改正(資料(7)参照)

庶務幹事より以下の改正について説明があり、資料(7)に示す改正案が承認された。

- 5-1 学会倫理憲章に伴う改正(第5条)
- 5-2 団体購読会員の廃止(第6条・第7条)
- 5-3 事務局の移転にとまなう改正(付則1)
- 5-4 施行日の変更(付則2)

6. その他の審議事項

- 6-1 会長推薦幹事の承認について

庶務幹事より、会長推薦幹事として遠藤邦彦、岡崎浩子、水野清秀各会員が提案された。これに対し評議員より、幹事の高選を禁ずる会則(第9条)があること、会長推薦幹事は当初は評議員以外の会員より選出したことなどの指摘があったが、今回は50周年事業等に関連して幹事会の充実をはかるといことで承認された。なお、幹事会の役割分担については当面暫定体制とし、次回の評議員会で追認を受けることとした。また、27日の総会の報告は暫定幹事でおこなうことが承認された。

- 6-2 会費滞納者の処分の件

庶務幹事より会費の長期滞納者(4年以上)・住所不明者リストが示され、次回請求時に納入されない場合は除名処分とせざるを得ないため、周知につき評議員の協力が要請された。

- 6-3 投稿規定の改定(資料(8)参照)

編集幹事より資料(8)の改定案が説明され、原案

通り承認された。

6-4 博物館連絡委員会設置の件（本誌「博物館連絡委員会の設置」参照）

熊井会長より資料にもとづき特別委員会設置の幹事会提案について説明があり、承認された。

6-5 各委員会の構成

池原幹事より編集委員会の構成案が、兵頭幹事より広報委員会の構成案がそれぞれ示され、いずれも承認された。ただし、幹事については暫定体制であることが補足された。

編集委員会：岡崎浩子（幹事）、池原 研（幹事）、荻谷愛彦、清永丈太、佐藤慎一、須貝俊彦、樽 創、中里裕臣、長橋良隆、藤原 治、横山祐典、米林 伸、綿引裕子（編集書記）

（このほか考古・土壌分野については交渉中のため決定後に改めて追認をおこなう予定）

広報委員会：兵頭政幸（幹事）、後藤秀昭、松下まり子、岩本容子（編集書記）

その他

石橋評議員より、「第四紀研究」および「第四紀通信」の印刷紙質について、軽量化できないかとの意見があり、池原幹事よりこれまでも一度見直しをおこない、薄い紙質のものになっているが引き続き検討するとの回答があった。

町田新会長より、INQUA 前会長ニコラス・シャクルトン教授が旭硝子財団の「ブループラネット賞」の受賞が決まり、10月に来日の予定であることが紹介された。

以上で報告・審議を終了し、議長解任の上閉会した。

産業技術総合研究所地質分野の公募案内

1. 深部地質環境研究センター：放射性廃棄物地層処分の安全評価を目的にして、断層運動、火山活動などの変動現象に関連する地下水流動機構を解明するために必要な、地質学並びに水門地質学分野の高度な解析能力を有する研究者を募集する。
2. 地質情報研究部門海洋地質研究グループ：層序学・堆積学・海洋地質学などの知識と研究経験を有し、主として音波探査（音響層序学）に基づいて海域の地質層序・構造を研究し、日本周辺海域の海洋地質図作成に従事できる研究者を募集する。
3. 地質情報研究部門火山活動研究グループ：野外調査を中心にした新生代火山岩地域の地質学研究を実施した経験があり、日本列島における新第三紀以降の火山活動の時間空間分布の解明、5万分の1地質図幅や地質標準の作成を遂行する能力を有し、かつ火山噴火時などの緊急野外調査に対応できる能力を有する研究者を募集する。
4. 地質情報研究部門沿岸都市地質研究グループ：都市圏平野地下を構成する第四系の工学的特性および強振動・液状化などの地質災害危険度評価について、実績と専門性を有しており、地質研究者と密接な連携をとりながら、土質工学の視点から研究を実施できる研究者を募集する。
5. グリッド研究センター科学技術基盤チーム/地質情報研究部門地質リモートセンシング研究グループ：衛星観測・地上観測・物質エネルギー循環モデルの統合を目的として、グリッド技術を用いて、インターネット上でデータ処理や情報検索など基盤システムと応用技術の研究開発に従事し、将来の地球観測システムの発展に意欲ある研究者を募集する。

募集の詳細は、<http://www.aist.go.jp/> から“人材募集” “公募選考採用” “地質分野”でご確認ください。

資料 (1) 2004年度収支決算報告書
(2004年8月1日から2005年7月31日まで)

収入の部				(単位: 円)
科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	要
会費収入	15,520,500	13,738,350	-1,782,150	
正会員会費収入	14,180,500	12,311,500	-1,869,000	通常会員(過年度)会費 12,017,000円(471,000円) 学生会員会費 285,000円 海外会員会費 9,500円
賛助会員会費収入	320,000	320,000	0	
団体会員会費収入	1,020,000	1,106,850	86,850	
誌代	1,300,000	773,555	-526,445	Back No.定期雑誌仕入(学会事務センター仕入分(＠162,000円×3回分)未回収)
別刷代・超過頁代収入	500,000	1,027,987	527,987	
雑収入	350,000	811,211	461,211	JICST, 大会余剰金, 著作権料収入
利子収入	2,000	1,970	-30	普通預金, 定期預金 各利息
役員選挙積立金取崩収入	350,000	350,000	0	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	1,000,000	1,000,000	0	2004年版会員名簿
科研費補助金・助成金	0	0	0	
収入合計	19,022,500	17,703,073	-1,319,427	
前期繰越金	4,869,454	4,869,454	0	
合計	23,891,954	22,572,527	-1,319,427	

支出の部				(単位: 円)
科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会誌発行費	7,370,000	5,763,512	1,606,488	
会誌印刷費	4,100,000	3,181,080	918,920	第四紀研究 43巻4号～44巻3号 計6号
会誌編集費	1,350,000	841,071	508,929	
会誌編集人件費	1,320,000	1,320,000	0	編集書記人件費
会誌別刷印刷費	600,000	421,361	178,639	第四紀研究 43巻4号～44巻3号 計6号
会誌・会報送費	1,200,000	1,049,357	150,643	第四紀研究 43巻4号～44巻3号 6号+6通信
会報発行費	950,000	883,305	66,695	第四紀通信 11巻4号～12 巻3号 計6通 信
会報印刷費	670,000	726,285		
会報編集費	20,000	520		
会報編集人件費	260,000	156,500		会報編集人件 費
大会運営準備金	400,000	400,000	0	2005年用(島根大会)
巡検準備金	100,000	100,000	0	2005年用(島根大会)
講演会・シンポジウム費	200,000	153,194	46,806	04/11/28 シンポジウム経費
予稿集印刷費	400,000	349,912	50,088	2004年山形大会要旨集(250部)
学会賞費	120,000	112,064	7,936	副賞(50,000円×2名), 賞状筆耕代
講習会費	100,000	3,580	96,420	05/05/29 講習会精算
通信費	350,000	315,420	34,580	会費請求書発送郵税等
会議費	50,000	19,563	30,437	2月評議員会経費, 会計監査経費
旅費・交通費	500,000	690,572	-190,572	幹事会旅費等
印刷費	150,000	348,712	-198,712	総会資料, コピー代等
業務委託費	3,300,000	2,013,479	1,286,521	資料(5) 参照
特別刊行物編集費	0	0	0	
50周年事業対策費	1,000,000	500,000	500,000	50周年記念事業実行委員会へ支出
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	700,000	756,802	-56,802	
名簿作成費	1,800,000	1,386,599	413,401	
名簿送費	0	0	0	
INQUA対策積立金繰入支出	100,000	100,000	0	
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	0	
名簿作成積立金繰入支出	0	0	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	0	
研究委員会助成金支出	80,000	120,000	-40,000	40,000円×3委員会(2委員会辞退)
加盟学協会分担金支出	20,000	20,000	0	自然史学会連合分担金(2005年度分)
雑費	150,000	164,001	-14,001	慶事費, 各種手数料等
助成支出	0	0	0	
予備費	200,000	0	200,000	
特別損失金	0	3,254,365	-3,254,365	(財)日本学会事務センターの破産による預け金損失金
支出合計	19,740,000	19,004,437	735,563	
次期繰越金	4,151,954	3,568,090	583,864	
合計	23,891,954	22,572,527	1,319,427	

資料 (2) 貸借対照表
(2005年7月31日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産		流 動 負 債	
預 け 金	0	未払費用	292,792
小口現金	1,070,327	前受会費	6,705,500
郵便振替	1,335,000	仮受金	100
普通預金	7,283,155	固 定 負 債	
定期預金	750,000	INQUA対策積立金	200,000
前払費用	128,000	予備費積立金	7,000,000
固 定 資 産		小 計	14,198,392
定期預金	7,200,000	前 期 繰 越 金	4,869,454
		当 期 収 支 差 額	-1,301,364
		(次期繰越金) 計	3,568,090
合 計	17,766,482	合 計	17,766,482

財 産 目 録
(2005年7月31日現在)

資 産 の 部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
預 け 金	破産者 財団法人日本学会事務センター	0
小 口 現 金	編集書記手許金	1,070,327
郵 便 振 替	会費徴収用払込口座	1,335,000
普 通 預 金	みずほ銀行早稲田支店	5,717,182
普 通 預 金	中央三井信託銀行本店営業部	1,565,973
定 期 預 金	中央三井信託銀行本店営業部	750,000
定 期 預 金	中央三井信託銀行本店営業部	7,200,000
前 払 費 用	(INQUA対策積立預金20万円；予備費積立金預金700万円) 2005年度第1回目会費請求書発送郵税	128,000
合 計		17,766,482

負 債 の 部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
未 払 費 用	事務局移転・初期引継費用 (株)春恒社	292,792
前 受 会 費	2005年度分以降年会費	6,705,500
仮 受 金	(株)春恒社口座開設立替分	100
積 立 金	INQUA対策積立金	200,000
	予備費積立金	7,000,000
合 計		14,198,392

資料 (3) 2004年度会計監査報告書

日本第四紀学会

会長 熊井久雄 殿

2004年度会計監査報告書

2005年8月10日(水)、(株)春恒社 会議室において日本第四紀学会
2004年度収支決算報告書(2004年8月1日～2005年7月31日)の
監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されて
いることを確認いたしました。


なお、日本学会事務センター破産に伴う諸処理が終了したこと、また
(株)春恒社との新たな事務委託に伴い、従来から指摘されていたいくつ
かの懸案事項が解決されていることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。


以上

2005年8月10日(水)

会計監査

菊地隆男 

会計監査

上杉 陽 

資料 (4) 2005年度予算案
(2005年8月1日から2006年7月31日まで)

収入の部				(単位:円)
科目	2005年予算案	2004年決算額	2004年予算額	摘要
会費収入	14,820,000	13,738,350	15,520,500	
正会員会費収入	14,000,000	12,311,500	14,180,500	9,000円×1,600名×94%+(学生5,000円×60名×90%)+(海外会員140,000円)
賛助会員会費収入	320,000	320,000	320,000	20,000円×13社(16口)
団体会員会費収入	500,000	1,106,850	1,020,000	10,000円×50団体 団体会員廃止に伴う移行期のため。
誌代	1,400,000	773,555	1,300,000	Back No. 定期雑誌仕入, 予稿集売上等
別刷・超過頁代収入	500,000	1,027,987	500,000	
雑収入	200,000	811,211	350,000	JICST, 著作権料
利子収入	2,000	1,970	2,000	
役員選挙積立金取崩収入	0	350,000	350,000	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	0	1,000,000	1,000,000	
科研費補助金・助成金収	0	0	0	
収入合計	16,922,000	17,703,073	19,022,500	
前期繰越金	3,568,090	4,869,454	4,869,454	
合計	20,490,090	22,572,527	23,891,954	

支出の部				(単位:円)
科目	2005年予算案	2004年決算額	2004年予算額	摘要
会誌発行費	6,420,000	5,763,512	7,370,000	第四紀研究 44巻4号-45巻3号
会誌印刷費	3,600,000	3,181,080	4,100,000	計6号
会誌編集費	1,000,000	841,071	1,350,000	
会誌編集人件費	1,320,000	1,320,000	1,320,000	編集書記手当
会誌別刷印刷費	500,000	421,361	600,000	
会誌・会報発送費	1,100,000	1,049,357	1,200,000	第四紀研究 44巻4号-45巻3号 計6号+6通信
会報発行費	920,000	883,305	950,000	第四紀通信 12巻4号-13巻3号
会報印刷費	700,000	726,285	670,000	第四紀通信印刷費
会報編集費	20,000	520	20,000	第四紀通信編集費
会報編集人件費	200,000	156,500	260,000	第四紀通信編集アルバイト代
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	2006年大会用
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2006年大会用
講演会・シンポジウム費	150,000	153,194	200,000	
予稿集印刷費	400,000	349,912	400,000	2005年島根大会講演要旨集, 編集アルバイト代
学会賞費	120,000	112,064	120,000	副賞(50,000円×2名), 賞状筆耕代
講習会費	100,000	3,580	100,000	
通信費	350,000	315,420	350,000	会費請求書発送郵税, 事務通信費等
会議費	50,000	19,563	50,000	評議員会会議費等
旅費・交通費	700,000	690,572	500,000	幹事会等交通費
印刷費	300,000	348,712	150,000	学会専用封筒, 総会資料印刷, コピー代金
業務委託費	2,949,450	2,013,479	3,300,000	資料(6)参照
特別刊行物編集費	0	0	0	
50周年事業対策費	1,000,000	500,000	1,000,000	
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	756,802	700,000	
名簿作成費	0	1,386,599	1,800,000	
名簿発送費	0	0	0	
INQUA対策積立金繰入支出	100,000	100,000	100,000	
役員選挙費積立金繰入支	350,000	0	0	
名簿作成積立金繰入支	500,000	0	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	500,000	
研究委員会助成金支出	200,000	120,000	80,000	40,000円×5委員会
加盟学協会分担金支出	20,000	20,000	20,000	自然史学会連合
雑費	150,000	164,001	150,000	
助成金支出	0	0	0	
予備費	200,000	0	200,000	会報臨時発送費(17万円)含む
特別損失金	-	3,254,365	-	
支出合計	17,079,450	19,004,437	19,740,000	
次期繰越金	3,410,640	3,568,090	4,151,954	
合計	20,490,090	22,572,527	23,891,954	

資料 (5) 2004年度業務委託費
(2005年1月1日～2005年7月31日)

I. 会員業務費用	<u>1,057,150</u>
1. 会員管理費	768,075 (1,881件× 700円×7/12ヶ月)
2. 特別請求書発行手数料 (団体会員)	111,600 (93件× 1,200円)
(賛助会員)	13,000 (13件× 1,000円)
3. 学会誌送信用ラベル作成・貼付・納品	126,475 (計 5,059件× 25円)
学会誌送信用ラベル出力手数料	3,000 (計 3回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	35,000 (1段× 5,000円×7/12ヶ月)
II. 受付業務費用	<u>210,000</u> (7/12ヶ月×30,000円)
III. 会計業務費用	<u>260,000</u> (会計処理事務 6/12ヶ月分)
IV. 庶務業務費用	<u>42,000</u> ※事務局会議出席費用
V. その他	<u>69,600</u> ※別刷請求手数料；同封手数料他
VI. 初期引継費用	<u>278,850</u> ※事務局移転に伴う移行費
消費税負担額 5%	<u>95,880</u>
<hr/>	
合 計	2,013,480

資料 (6) 2005年度業務委託費見積
(2005年8月1日～2006年7月31日)

I. 会員業務費用	<u>1,853,000</u>
1. 会員管理費	1,330,000 (1,900件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (団体会員・海外会員)	84,000 (70件× 1,200円)
(賛助会員)	13,000 (13件× 1,000円)
3. 学会誌送信用ラベル作成・貼付・納品	240,000 (計 9,600件× 25円)
学会誌送信用ラベル出力手数料	6,000 (計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	180,000 (1段×@15,000円/月)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u>
IV. 庶務業務費用	<u>66,000</u>
V. その他	<u>100,000</u> ※別刷請求手数料；同封手数料他
消費税負担額 5%	<u>140,450</u>
<hr/>	
合 計	2,949,450

資料(7) 日本第四紀学会会則(改正案;下線部)

日本第四紀学会会則

(1956年4月29日,総会にて決定)
 (1995年8月26日,総会で一部改正)
 (2002年8月24日,総会で一部改正)
 (2004年8月28日,総会で一部改正)
 (2005年8月27日,総会で一部改正)

第1章 総則

第1条 本会は日本第四紀学会(Japan Association for Quaternary Research)という。

第2条 本会は第四紀を中心とする諸問題を,関係各分野の協力により解明し,第四紀学の進歩と普及をはかることを目的とする。

第3条 本会は第2条の目的を達成するために下記の事業を行なう。

1. 会誌,その他出版物の発行。
2. 学術講演会,普及講演会,談話会の開催。
3. その他研究に関する事業。

第4条 本会会則の変更は総会の決議によって行なう。

第2章 会員

第5条 本会は第四紀学に関心をもつ会員で組織する。会員は会則と倫理憲章を遵守する義務を負う。会員は会誌の配布を受け,第3条に規定した事業に参加する権利を有する。

第6条 会員は正会員,(削除)団体購読会員,賛助会員および名誉会員の3種とする。正会員は第2条の目的達成に寄与する個人とし(削除)団体購読会員は会誌を定期的に購読する大学・研究所・博物館その他の機関とする。賛助会員は,第2条の目的を賛助する会社その他の法人とする。名誉会員は第四紀学について顕著な功績ある者の中から評議員会が推薦し,総会の決議によって定める。

第7条 会員は総会の議決によって定められた会費を納めなければならない。会費は前納とし,年額正会員9,000円(ただし,学生・院生は5,000円),(削除)団体購読会員10,000円,賛助会員1口(20,000円)以上とする。名誉会員は会費の納入を要しない。1年以上会費を滞納した会員は,評議員会の議をへて除名されることがある。

第3章 総会

第8条 総会は正会員をもって組織し,欠席正会員の委任状を含み全正会員の10分の1以上の出席がなければ,成立しない。出席正会員は2名以上の欠席正会員の委任を受けることはできない。総会は年1回以上会長が招集し,本会運営の基本方針を決定する。

第4章 役員および役員会

第9条 本会の役員は,会長1名,副会長1名,評議員若干名,会計監査2名,評議員互選幹事6名,会長推薦幹事3名以内とする。役員任期は2年とし,会長および副会長は重任を妨げない。評議員は6期以上,会計監査は2期以上,幹事は3期以上連続して就任できない。なお,評議員互選幹事の任期は合算して4期(8年)を越えることはできない。

第10条 評議員は正会員の中から互選される。ただし,会長経験者は被選挙権を有しない。会長・副会長・会計監査は正会員の中から評議員会において選出され,幹事は評議員の互選と会長の推薦による。会長推薦幹事については,評議員会の承認を必要とする。なお,役員の選出は別に定める役員選挙規定により行なう。

第11条 評議員に任期を1年以上残した時点で欠員が生じた場合,次点者を補充する。

第12条 会長は本会を代表する会務を統括する。副会長は会長を補佐し,会長に事故あるときは,その職務を代行する。

第13条 評議員は評議員会を組織して,本会の基本方針に従い,運営要項を決定する。評議員会は評議員の3分の1以上の出席(委任状を含む)をもって成立する。ただし出席評議員は2名以上の欠席評議員の委任を受けることはできない。

第14条 会長・副会長・会長経験者および会長推薦の幹事は,評議員会に出席し,意見を述べることができる。

第15条 幹事は,庶務,会計,編集,行事などに関する会務を執行する。

第16条 幹事は幹事会を構成する。幹事会は幹事長1名を互選する。幹事会は会務を執行するために庶務・会計・編集・行事に関する委員会を置くことができる。各委員会の委員は幹事会が正会員の中から選び,会長が委嘱する。

第17条 本会は必要に応じ評議員会の承認を得て特別委員会をおくことができる。

第5章 会計

第18条 本会の経費は,会費,寄付金,補助金等による。

第19条 本会の会計年度は毎年8月1日に始まり,7月31日に終わる。

第20条 本会の会計は毎年総会の前に監査を受けるものとする。

付則 1 本会事務局は東京都新宿区早稲田鶴巻町519番地 洛陽ビル3階に置く。

付則 2 本会則は2005年8月27日より施行する。

資料(8)

投稿規定

1. 投稿資格

投稿者の少なくとも1人は投稿時に本会会員であること。ただし、編集委員会による依頼投稿の場合はこの限りではない。

2. 第四紀研究に掲載される原稿

内容が第四紀に関わるものであり、体裁が別に定めた「執筆要項」に合致すると、編集委員会が認めたもの。

2-1. 言語：日本語または英語。

2-2. 原稿の種目

原著論文：著者自身によるオリジナルで未発表の研究成果をまとめたもの。

短報：研究の中間報告など大きな研究の一部をなすもの、および速報性を必要としたり、資料として重要なもの。

総説：ある分野に関する研究成果を総覧し、総合的にまとめ、研究史、研究の現状、将来への展望などにふれたもの。

討論：本誌に掲載された原著論文・短報・総説などについて、投稿原稿のかたちで1年間、コメント(賛否・注釈・質問など)を受け、編集委員会の判断により、意義のあるものを誌上に公開する。必要に応じて、原著者の回答も掲載する。

資料：露頭・化石・遺物などのスケッチ・写真や、重要な図・表、年代測定の数値などの資料に簡単な説明をつけたもの。口絵とすることもできる。

解説：第四紀学に関連するテーマ・用語などについての解説。

講座：ある分野の研究の現状・成果や調査法・分析法などを、特に他分野の会員に紹介・普及する目的で平易に書かれたもの。

書評：単行本の内容の紹介および批評。

雑録：学会もしくは第四紀学に関する記事・報告など。ただし、編集委員会が認めたものに限り。

2-3. 原稿の長さ：原著論文・総説・講座は刷上り14ページ以内、短報は6ページ以内、討論・解説・資料は4ページ以内、書評は2ページ以内とする。なお、刷上り1ページは25字×43行×2段である。やむを得ず超過した場合は、その費用は依頼原稿を除き著者の負担とする。

3. 二重投稿・著作権

3-1. 他の原著論文誌に掲載済み、または投稿中の原稿は投稿できない。ただし、「第四紀研究」にふさわしく書き直されたものはこの限りではない。

3-2. 所内報、または研究グループ誌のような性格の出版物、非原著論文(商業誌など)、単行本、官庁出版物などと重複した内容を持つ原稿は、投稿するとき必ずその旨を明記し、著者自身で著作権問題を解決し、かつそれを示す資料を添える。

3-3. 著作権が他の学会・出版社にある出版物より図・表などを引用する場合は、著作権問題は同様

に著者自身が解決しておくものとする。

3-4. 掲載された論文の著作権(copyright)及び全ての媒体を通じての公表に関する権利は、日本第四紀学会が所有する。

3-5. 著者は、原稿の受理決定後、最終原稿とともに著作権等委譲承諾書を学会宛に提出する。また、日本第四紀学会が著作権を所有する著作物を利用するにあたっては、別途定める規定に従い、日本第四紀学会からの受諾を必要とする。

4. 投稿手続き

投稿者は封筒に「第四紀研究原稿」と明記して原稿・図・図版・表・送り状のコピー3部を、学会事務局(会誌奥付の学会事務センター)へ編集委員会(本規定の末尾及び会誌奥付の学会事務局の住所)に送付する。なお、編集委員会から要請があった場合には、図・図版・表の原図を提出する。

5. 受付

学会事務局編集委員会が原稿を受けとった日を受付日とする。

6. 受付後の原稿の処理

6-1. 編集委員会は、投稿原稿の内容に応じてレビューを決め、査読を依頼する。

6-2. 編集委員会は、査読結果を参考に原稿の内容・表現に問題があると判断したときには、著者に修正を求めることができる。また「執筆要項」に従い、用語・用字などを変更することがある。活字の種類・大きさ、図表の大きさや全体の体裁は、編集委員会が決める。

6-3. 原稿が修正のため投稿者の手元にかえたまま、6ヶ月経過したときは、その論文はとりざげられたものとみなす。

6-4. 論文の受理は編集委員会が決める。編集委員会が掲載を決定した日付をもって論文の受理日とする。

6-5. ワードプロセッサ使用の原稿は、受理時の最終原稿を入力したフロッピーディスクの電子ファイルを提出する。

6-6. 受理後、原稿の細部の体裁は、編集委員会が調整・判断し修正を求めることがある。

7. 校正

著者校正は初校時のみ行なう。著者校正時の加筆は原則として認めない。著者は、初校ゲラを受け取ったら速やかに校正を行ない、編集委員会(編集書記)に返送する。期日までに返送がない場合は、著者校正を省略するか、次号にまわすこともある。

8. 別刷

別刷は50部単位で希望することができる。50部については学会が費用を負担する。100部以上申し込んだ場合は、そのうちの50部分について学会が費用を負担する。表紙が必要な場合は、表紙の費用は全額著者負担とする。別刷費用については別途定める。

9. 原稿の返却

掲載された原稿・図・図版・表などは返却しない。

10. 投稿規定の改正

この「投稿規定」の改正は、幹事会が原稿案を作り、評議員会に報告して承認を求める。「執筆要項」は編集委員会がこれを定め、改正があったときは幹

事に報告し、承認を求める。

*上記の投稿規定 2-3 超過分の著者負担は、当分の間 1 ページにつき 20,000 円とする。

*原稿送付先：〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519番地 洛陽ビル3階 日本第四紀学会編集委員会。

付則 本規定は20042006年1月1日から実施する。

執筆要項

1. 原稿

A4 判を使用し、ワードプロセッサで作成する。1 ページ 25 字 × 22 行で印字し、行間は 1 行分程度あけ、用紙の上下左右の余白を十分とる。英文については 12 ポイント、22 行で印字する。1 ページ目に表題、著者名、ランニングタイトルを、2 ページから摘要、キーワードを記入する。

2. 表題・著者名

著者名の右肩に *¹, *², …… の記号をつけ、原稿の第 1 ページの下部に脚注として所属とその所在地、論文責任者の連絡先(住所・Eメールアドレスなど)を明記する。

3. ランニングタイトル(1 ページ目)

表題と著者名のランニングタイトルは、それぞれ日本語では 30 字以内、英語では 8 語以内とする。

4. 摘要・キーワード(改ページ)

4-1. 摘要、キーワードは原稿のページを改めて書き始める。

4-2. 原著論文・短報・総説には、本文と同じ言語で内容の要点を知らせる摘要(abstract)をつける。

4-3. 摘要の長さは、本文が日本語原稿の場合は 400 字以内、本文が英文原稿の場合は、300 語以内とする。

4-3. 摘要の最後には、時代・地域・対象・方法などを表す 5 語程度のキーワード(keywords)を日本語と英語の両方でつける。

(例)キーワード: 完新世, 大阪層群, 関東平野, 花粉分析, ナイフ形石器

Keywords: Holocene, Osaka Group, Kanto Plain, pollen analysis, backed-blade-knife

5. 本文(改ページ)

5-1. 本文は原稿のページを改めて書き始める。

5-2. 文章は現代かなづかい、常用漢字を用いる。ただし、固有名詞や慣用語はこの限りではない。

5-3. 句読点などは、, , . . : ; 「」() - を用い、それぞれ 1 字分あてる。

5-4. 学名・人名・地名・(訳語が定着していない)術語などを除き、なるべく外国語綴りあるいはそのカタカナ表記はさける。

5-5. 生物の和名は初出時に原則として学名を併記する。

5-6. 地名などの漢字で読み誤るおそれのあるものには、ふりがなをつける。

5-7. 数量の単位は SI 単位を用いる(例: m, kg,

m/s², , Hz, , mol)。その他の略号については慣例に従う(例: ¹⁴C, 年 BP, yrs BP, cal BP, Ma, ka, ca., vs., etc.)。

5-8. 英語原稿は適当な人の校閲をうけておく。

5-9. 次の字体はあらかじめ指定しておく。なお、章立てなどの見出しの太文字は、編集委員会で指定する。

)生物の学名などイタリック体で印刷される字体は、下線を引く。

)まぎらわしい文字は誤読防止の指示を鉛筆で記入する(例: l-エル, 1-イチ, I-アイ, -アルファ, -ガンマ, w-小文字, W-大文字)

)数式の場合は、特に上ツキ, 下ツキ, および大文字・小文字・イタリック体などの指定をする。

5-10. 脚注は原則として認めない。ただしやむを得ず脚注をつける場合には、本文中の注意書きは、その箇所に通し番号で^{1), 2)}…の記号をつけて脚注とし、別紙にまとめて書く。

6. 図

6-1. 図にはそれぞれ図 1, 図 2, Fig.1, Fig.2 のように番号をつける。本文右側に挿入希望位置を記入する。

6-2. 図にはインクで明瞭に書かれたものか、これと同程度のもので、そのまま写真製版が可能なものに限る。

6-3. 原図の大きさは B4A4 判大(約 36cm × 約 26cm)以内とする。小さい図(表)の場合でも A4 判大の用紙に書くか、貼る。図には番号と著者名を明記する。

6-4. 図の内容の大きさを示す場合には、図にスケールを入れる。

6-5. 図の縮小率は編集委員会で決めるが、希望縮小率(実際に縮小して確認のこと)を鉛筆で添え書きできる。一般には 1 ページ幅(14.5 × 20.0cm)またはその半幅(7.0cm)に縮小することが多いので、線の太さ、文字の大きさ、キャプションの量などに注意する。コンピュータで作図する際、複雑な模様は使用しない。グラデーションは、印刷時に出るとは限らないので極力避ける。

6-6. 地図を使用する場合には、必ず方位を示す記号と縮尺を示すスケールを入れる。方位を示す場合は、真北と磁北のいずれかの区別が明らかな記号とする。

6-7. 凡例は説明とともに本図から独立させず、図中に入れる。

6-8. 受理後の最終原稿の図は電子ファイルで提出できるが、印刷したものを必ず添付する。

7. 表

7-1. 表には、表 1, 表 2, Table 1, Table 2 のように番号を付ける。本文右側に挿入希望位置を記入する。

7-2. 表は、縦・横の罫線による枠組みの中に文字や記号を記入したのものに限る。罫線間の長さの意味がある場合や曲線を含むものや、枠の中に図が書かれたものは「図」扱いとなる。表はそのまま写真製版が可能なものに限る。

7-3. 受理後の最終原稿の表は電子ファイルで提出できるが、印刷したものを必ず添付する。

8. 図版

8-1. 図版は、図版として示すべき十分な理由があり、かつ原図が鮮明なものに限る。

8-2. 図版は1ページごとに図版I, 図版II, Plate I, Plate IIのように番号をつける。

8-3. 横と縦は14.5 × 20cmとなるから、できるだけこの比率になるように写真原稿を白い台紙に貼る。図版の内容の大きさを示すスケールを入れる。

8-4. 受理後の最終原稿の図版は電子ファイルで提出できるが、印刷したものを必ず添付する。

9. カラー図・カラー図版

編集委員会でカラー図・カラー図版を認めることがある。著者はその旨投稿時に申し出ること。費用は著者負担とする。

10. キャプション(図表などの表題や説明文)

別紙にまとめて書く。日本語論文の場合でも日本語のほかに英語キャプションをつけることができる。表のキャプションは、表題のみとし、表の内容の説明文は、表の下に入れる。

11. 引用

11-1. 文中の引用は次の例にならう。

この研究(湊・陶山, 1950; 多田, 1975; 松井ほか, 1977)によると……………

……………という結論が得られている(Cox and Dalrymple, 1967)。

小林(1951a, b), 湊(1974)の研究によれば……

……………と Miller(1979: p.25-26)は述べている。

11-2. 卒業論文・修士論文は原則として引用しない。

11-3. ほかの投稿雑誌に受理されていない論文は引用しない。なお、受理後未刊行のものについては(印刷中)(in press)として引用することができるが、当該論文のコピーを添付する。

11-4. ホームページの引用は原則として公的機関等が運用するものからのみとし、URLを明記する。

12. 引用文献

12-1. 引用文献は、日本語・英語を問わず著者のアルファベット順にならべる。同一著者の場合は年代順にならべ、年代が等しい場合は本文の引用順に a, b, ……をつける。同一著者が筆頭著者である共著論文がある場合は、単独論文を前にする。共著論文では、筆頭著者、第二著者、第三著者以降のアルファベット順とし、同一組み合わせの著者の場合には年代順にならべる。

12-2. 雑誌名は原則として省略しない。

12-3. 雑誌の巻・号は区別せず、数字のみとする。巻・号のある雑誌で通巻ページの場合、号数は省略する。毎号ページが変わる場合には号数を()に入れ、例えば、10(2)のようにする。

12-4. ページは、単行本の総ページを示すときは25 p, 単行本および論文の該当ページを示すときは、コロン(:)に続き10-25のようにする。その他の表記は例にならう。

12-5. 学術雑誌などの電子出版物を引用する際に

は、特別の引用表記方法が指定されている場合を除いて、通常の印刷出版物と同様の表記とする。印刷出版物と電子出版物が同時に出版されている場合には、原則として印刷出版物を引用する。

12-6. 引用文献の例

Cox, A. and Dalrymple, G.B. (1967) Geomagnetic polarity epochs, Nunivak island, Alaska. *Earth and Planetary Science Letter*, 3, 173-177.

Embleton, C. and King, C.A.M. (1957) *Periglacial geomorphology*. 230p, Halsted Press.

Heiken, G. and Wohletz, K. (1991) *Fragmentation processes in explosive volcanic eruptions*. Fisher, R.V. and Smith, G.A. (eds.) *Sedimentation in volcanic settings: 19-26*, SEPM Special Publication, 45, SEPM.

貝塚爽平・鈴木毅彦(1992) 関東ロームと富士山。土と基礎, 40(3), 9-14.

川辺禎久・坂口圭一・斎藤 眞・駒澤正夫・山崎俊嗣(2004) 20万分の1地質図幅「開聞岳及び黒島の一部」。産業技術総合研究所地質調査総合センター。

小林国夫(1951a) フォッサ・マグナ西部付近に於ける第四紀編年。信州大学文理学部紀要, 1, 9-25.

小林国夫(1951b) 常念岳東方の断層地層の関する一考察。地理学評論, 24, 377-381.

国土地理院(1997) 数値地図 50mメッシュ(標高)日本-II。CD-ROM版。

小松原 琢・中澤 努・兼子尚知(2004) 木更津地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 64p, 産業技術総合研究所地質調査総合センター。

メイスン, S.(矢島祐利訳(1955) 科学の歴史。695p, 岩波書店 [Mason, S. (1953) *A history of the sciences*.]

松井 健・杉村 新・渡辺直経(1977) 日本第四紀学会史。日本第四紀学会編「日本の第四紀研究」: 1-9, 東京大学出版会。

Miller, H. (1970) Method and results of river terracing. Dury, G.H. (ed.) *Rivers and river terraces*: 19-35, Mac-millan.

湊 正雄(1974) 日本の第四系。167p, 築地書館。

湊 正雄・陶山国雄(1950) 沖積世の問題。地球科学, 3, 1-16.

能城修一・鈴木三男(1989) 野川中洲北遺跡の木材遺体群集。小金井市遺跡調査会編「野川中洲北遺跡-自然科学分析編」: 69-93, 小金井市遺跡調査会。

奥野 充・松島義章・長岡信治・福島大輔・成尾英仁・森脇 広・小林哲夫(2000) 始良カルデラ東壁にみられる最近10万年間のテフラ。火山, 45, 41-46.

奥野 充・松島義章・長岡信治・森脇 広・新井房夫・中村俊夫(1998) 南九州, 鹿児島湾の

燃島貝層中のベッコウガキの加速器¹⁴C年代、
 福岡大学理学集報, 28(2), 123-128.
 相模原市教育委員会 (2003) 田名向原遺跡 I,
 87p, 相模原市教育委員会.
 Stow, D.A.V. and Piper, D.J.W. (eds.) (1984)
 Fine-grained sediments: deep-water processes and facies. 659p, Geological Society, Special Publication, 15, Blackwell.
 多田文男 (1975) 日本における砂丘研究史. 日本第四紀学会講演要旨集, 4, 25-26.
 博士論文等の未公表論文の引用は下記のようにする.
 Kubo, S. (1995MS) Buried terraces in the Lower Sagami Plain, central Japan: Indicators of sea levels and landforms during

the Marine Isotope Stage 4 to 2. Doctoral dissertation to Tokyo Metropolitan University. 147p.

13. 要旨
 13-1. 原著論文・総説・短報には, 本文と異なる言語(英語論文の場合は日本語)で, 内容を要約した要旨(Summary)をつける. 短報の場合には省略することができる. 要旨の長さは刷り上がり1ページ以内とする.
 13-2. 表題, 著者名および要旨, 本文, キーワードの順に書き, 脚注に所属とその所在地を書く.
 13-3. 英語要旨には, すみやかに校閲するために日本語対訳を別紙で添える. ただし, この対訳は印刷されない.

付則 本要項は2004-2006年1月1日から実施する.

資料(9)

日本第四紀学会 2005 ~ 2006 年度役員名簿
 (2005年8月1日 ~ 2007年7月31日)

会長 町田 洋
 副会長 真野勝友
 会計監査 岩田修二 松浦秀治

評議員

共通分野

岡田篤正 小野有五 公文富士夫 町田 洋
 吉川周作

地質学分野

池原 研 井内美郎 岡崎浩子 斎藤文紀
 杉山雄一 竹村恵二 福澤仁之 水野清秀
 三田村宗樹

地理学分野

岩田修二 上杉 陽 奥村晃史 久保純子
 小泉武栄 鈴木毅彦 宮内崇裕

古生物学分野

犬塚則久 河村善也 高橋啓一 辻 誠一郎

動物学分野

土 隆一 宮武頼夫

植物学分野

松下まり子 百原 新

土壌学分野

三浦英樹 渡邊眞紀子

人類学分野

小池裕子 松浦秀治

考古学分野

阿部祥人 小田静夫 長友恒人

御堂島 正

地球物理学分野

石橋克彦 兵頭政幸

地球化学分野

大場忠道 中村俊夫

工学分野

大石道夫 陶野郁雄

幹事

池原 研 遠藤邦彦 岡崎浩子 奥村晃史 久保純子 斎藤文紀 鈴木毅彦 兵頭政幸 水野清秀

編集委員会

岡崎浩子(幹事) 池原 研(幹事) 苅谷愛彦、清永丈太、佐藤慎一、須貝俊彦、樽 創、中里裕臣、長橋良隆、藤原 治、横山祐典、米林 仲書記 綿引裕子

広報委員会

兵頭政幸(幹事) 松下まり子、後藤秀昭書記 岩本容子

2005年度総会議事録

日時：2005年8月27日(土) 10:45-12:00

場所：島根大学教養講義室棟1階100教室

出席者：63名、委任状248通

議長：陶野郁雄

記録：久保純子

新幹事の役割分担が未定で暫定体制のため、久保幹事の司会で町田新会長挨拶の後、陶野郁雄会員を議長に選出し、定足数確認の上、配付資料にもとづき下記の報告・審議がおこなわれた。

報告事項

1. 2004年度事業報告

久保幹事より各事業の報告(本誌「第1回評議員会議事録」掲載)があった。2004年度の逝去会員に対し黙祷をおこなった。

2. 2004年度決算報告・会計監査報告

鈴木幹事より決算報告(本誌「第1回評議員会議事録」資料(1)(2)の、ついで菊地会計監査より会計監査報告(本誌「第1回評議員会議事録」資料(3))があった。そのさい、学会事務センターのときの懸案事項であった預け金制度が現在は解消したことの補足説明があった。また、議長より昨年度の学会事務センター破産後の処理について、熊井会長以下旧幹事会に対し謝意が述べられた。

3. 研究委員会報告

久保幹事より、各委員会の活動報告(本誌「2004年度研究委員会活動報告」掲載)がされた。

4. 日本学術会議研連報告

町田会長より、4-1 地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会の報告と、久保幹事より、4-2 古生物学研究連絡委員会の報告(本誌「日本学術会議研連報告」掲載)がおこなわれた。

5. 選挙管理委員会報告

久保幹事より、委員会の活動ならびに選挙結果の報告(本誌「選挙管理委員会報告」掲載)があった。

6. 論文賞選考委員会報告

久保幹事より、委員会による選考結果の報告(本誌「2005年論文賞」掲載)があり、審議終了後に表彰式がおこなわれる旨案内があった。

7. 学会倫理憲章策定委員会報告

久保幹事より、委員会の活動報告(本誌「学会倫理憲章策定委員会報告」掲載)があった。

8. 50周年記念事業実行委員会報告

山崎前幹事長より、本誌「50周年記念事業実行委員会報告」掲載事項の報告があった。

9. その他の報告事項

久保幹事より、昨日の評議員会で承認された以下の各件(本誌「第1回評議員会議事録6. その他の審議事項」掲載)が報告された。

9-1 新幹事の構成について

9-2 会費滞納者の処分の件

9-3 投稿規定の改定

9-4 博物館連絡委員会の設置

9-5 編集委員会・広報委員会の構成

審議事項

1. 2005年度事業計画

久保幹事より本誌「第1回評議員会議事録」掲載事項の説明があり、いずれも原案通り承認された。

2. 2005年度予算案

鈴木幹事より本誌「第1回評議員会議事録」掲載事項と資料(4)(5)(6)にもとづき説明があり、原案通り承認された。

3. 50周年記念事業に関わる募金の実施

久保幹事より本誌「第1回評議員会議事録」掲載事項の説明があった。これに対し、募金方法に関する質問があり、専用口座を設けた後会員に周知するとの回答があった。本件は原案通り承認された。

4. 学会倫理憲章の策定

久保幹事より学会倫理憲章案(本誌「日本第四紀学会倫理憲章」参照)が示され、原案通り(会則の改正は次項で審議)承認された。

5. 会則の一部改正(資料(7)参照)

久保幹事より本誌「第1回評議員会議事録資料(7)」掲載の会則改正案について説明があり、いずれも原案通り承認された。

以上で報告・審議を終了し、議長解任後、町田会長より論文賞受賞者の長島佳菜・北村晃寿両氏に表彰状と副賞が贈られた。



論文賞受賞式風景

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学内海域環境教育研究センター 兵頭政幸

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5734 Fax 078-803-5757

広報委員：松下まり子・後藤秀昭 編集書記：岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/qr> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。